

第8回

全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

発表

全国同人雑誌振興会・文芸思潮による第8回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」選考会は、二〇一四年九月三十日火曜日に東京都大田区民プラザ会議室において、三田誠広氏、中上紀氏、小浜清志氏、五十嵐勉「文芸思潮」編集長の四名の選考委員によって厳正に行なわれました。今回もどれも力のもった作品で、一作品ごとに選考委員それぞれから熱い感想・批評が発せられ、濃密な議論が交わされました。選考の結果、以下のように決定いたしましたので、ここに選評とともに発表させていただきます。

また昨年より、読者賞を設け、全国からの読者の投票と寄付により、別な形での表彰と賞揚も行なうこととしております。その投票および内容の結果も併せてここに発表させていただきます。

「まほろば賞」受賞作品には、賞状と賞金十万円（賞金は寄付によるものです）および記念トロフィー、また今回は特に木内是壽氏の特別寄贈により、薩摩焼の名作壺を贈らせていただきます。また特別賞には賞状と賞金五万円・記念トロフィーを、五十嵐勉賞には賞状と賞金五万円・記念トロフィーおよび五十嵐勉自筆の書道作品（条幅掛軸）を、また優秀賞には賞状と賞金一万円・記念メダルを贈らせていただきます。

情熱のこもった充実した優秀作品に、それぞれの地域、それぞれのグループでの同人雑誌の豊かな創作力を見ることができました。

今後も全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈念し、たくさんの方の同人雑誌の作品が全国同人雑誌振興会・文芸思潮に寄せられてくることを期待しております。

次回第九回の全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」対象の同人雑誌は二〇一四年十二月三十一日までの発行の同人雑誌とさせていただきます。奮って御応募ください。

また、どうぞ作品の推薦にも多数の方が御参加くださり、また積極的に読者賞への投票に加わっていただき、ぜひ皆様自らの熱い手で同人雑誌の優秀作品を選び、育てていただきたいと思います。存じます。

全国の同人雑誌諸氏の熱い支持を切に願います。次第です。

選考会の模様の一部は、ユーチューブにも載っておりますので、どうぞ御覧いただけましたら幸いです。

なお、まほろば賞の表彰は、明年二〇一五年二月十五日東京都大田区民プラザで開かれます文芸思潮授賞式で他の賞と併せて行なわれる予定です。

特別賞

「蟹」 (白鵝) 28号

尾本善治

第8回全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞



五十嵐勉賞

「鳩の血」 (白鵝) 28号

美月麻希

優秀賞

「だれも知らない部屋の皮膚」 (文芸中部) 90号

北川朱実

読者賞

「訣別」 (石榴) 15号

木戸博子

「ゼロ時計」 (空飛ぶ鯨) 14号

辻村仁志

「うずすみ」

(ふくやま文学) 24号

中山茅集子



薩摩焼 第十五世沈壽官作

まほろば賞賞金は、三田村博史氏、原石寛氏、夏目火美子氏、木内是壽氏、蘭藍子氏、ゴルビー長田氏などの御寄付によるものです。ここに深く御礼申し上げます。また「群系」「安芸文学」など文芸思潮同人誌団体会員の御協力にも厚く御礼申し上げます。



みた まさひろ
1948 大阪生まれ
早稲田大学文学部卒
77「僕って何」で芥川賞受賞
作品はほかに「いちご同
盟」「空海」など
日本文藝家協会副理事長
日本ペンクラブ理事
著作権情報センター理事
日本点字図書館理事
武蔵野大学文学部教授

文体の強さとソフト

三田誠広

文章、あるいは文体には、強度がある。やたらと難解な文章、虚仮威しものものしい文章、最先端を気取っている文章は、本人は自己満足している、もろさが目立つものだ。そうではなく、読みやすいごくふつうの文章なのに、じわっと重みが伝わってくるような文章がある。中山茅集子さんの『うずみ』の文章はそういうもので、読み始めると文章の力に圧倒された。年季の入った完成された文体だと感じられた。日常のさりげないひとこまから過去がよみがえってくるというのは、日本文学の伝統的な手法だが、文体の強度が文学としてのレベルを支えている。質素であること、を強要された過去の時代の、ささやかな抵抗とも見える料理の想い出から始まった文章は、やがて戦争、および終戦直後の厳しい生活につながっていく。そこから思いがけず幻想的な光景が立ち現れるところが見事で、ただの私小説を超えた、文学の深さ、多様さが、この短い作品に結晶しているように感じられた。

尾本善治さんの『蟹』の出だしの文章の強度も見事なもので、蟹が充滿した息を呑む光景が、読み始めた者を作品の世界に引きずり込む。不快な侵入者である蟹を主人公は殺すことができない。世間の中に自分は異物として存在しているのではないかという、過敏な自意識が、この冒頭の執念の窓際に配置された人々の、うら寂しい生活の一端が、ある種の切実さとリアリティーをもって描かれる。ただし、描かれている対象のもつ切実さに対して、そこに小説としての仕掛けを持ち込んで、切れ味のいい小品に仕上げようとした手つきが、うまくいっているように見えて、結果としては話がまとまりすぎてつまらなくなっている。小説を書くのは難しいなと、この作品を見ているとしみじみと思ってしまう。小説はうまく書けばいいというものではない。どこかが壊れてもいいのだ。その破れ目のようなところから、作者も制御不能の何かが強力飛び出してきた時に、作品のスケールが作者の意図を超えて大きなものになっていくことがある。

木戸博子さんの『訣別』は、人生の終盤にさしかかった女性の、さまざまなものへの別れを描いた作品で、好感をもって読んだ。父が遺した建物がやがて解体されていく。癌に冒された自分の肉体が壊れていく。その他にも多くのものに、ヒロインは別れを告げなければならない。そうした状況は必然的に、ややセンチメンタルな哀感につながっていく。『うずみ』や、『蟹』の冒頭部分と比べると、文体に弱さがある。ただこの文体は、この作品に限っては効果を挙げている。この作品はこれで十分に佳品になっているので、このままでいいのだと思う。

早稲田1968
団塊の世代に生まれて

三田誠広

村上春樹も立松和平も
学生だった
団塊世代が忘れられない
あの時代、あの季節

大学闘争、パリケード、
ゴーゴー喫茶、ビートルズ……

廣済堂新書

深いほど濃密な蟹の描写をもたらしたのだろう。だとすれば冒頭の文体の強度は、次に展開される福祉施設の女をめぐる回想の文体にも持続されなければならぬところだが、残念ながら蟹がいなくなると、文体の強度がいくぶん下がったように感じられた。蟹はただの訪問者にすぎず、後半の女をめぐる物語にこそ、より強度の高い文体が必要なのではないか。蟹の印象があまりに強すぎて、女の印象がうすれてしまう。この女もまた異物としてしか生きられなかった蟹のような存在なのだろうと思われる。もっと具体的に細密な描写が求められる。

美月麻希さんの『鳩の血』の文体は、素直で軽快なものだ。冒頭、少し重苦しい描写が出てくるのだが、それ以後は描写の密度よりも話の展開を重視した文章がテンポよく続いていき、読みごたえがあった。エピソードを詰め込みすぎている、一つ一つの場面に深さがなく感じられるのだが、次々と思いがけないことが起こるのが人生のつねなのだし、吟味するいとまもなく生きていかなければならないのが、人間の宿命だろう。説明なしで投げ出された出来事の羅列に、書き手のある種の潔さを感じた。男を信頼することができず、時として粗暴になる、ボクシングを習っているヒロインの女性は、十分に魅力的で、読み終えたあとの充実感という点では、この作品が図抜けていた。

北川朱実さんの『だれも知らない部屋の皮膚』は着想が秀逸で、ヒロインが出したゴミを丹念に調べるストーカーの魔の手がじわじわと迫るところにスリルがある。この作品の優れているところは、ヒロインが単なる被害者に終わらず、きわめて人間的な屈折した心理をかかえていて、しだいに被害者と犯人の立場が逆転していく話の展開にある。最後に犯人の人物像が見えた時に、かえって犯人に同情したくなってしまいうような仕掛けがあって、それはこの作品の大きな魅力だと思われる。ただ残念なのは、その魅力的な着想に頼り切っていて、世界が狭いままで終わっていることだ。それは着想そのものの限界だと思われる。着想だけでは小説は書けない。この作品をインパクトの強いものにするためには、文体の強度といたったものが必要ではないか。

辻村仁志さんの『ゼロ時計』も着想に頼った作品で、ある菓子メーカー



ながみ のり
1971 東京生まれ
ハワイ大学美術学部卒業
99『イラワジの赤い花 ミャンマ
の旅』（集英社）を上梓
同年『彼女のプレнка』（集英社）
ですばる文学賞受賞
『悪霊』（毎日新聞社）『いつか物
語になるまで』（晶文社）『夢の
船旅—父中上健次と熊野—』（大
田書房新社）『アジア熱』（大
出版）『チャーマンが歌う夜』（新
潮社）『集英社』『海の宮』（新
潮社）『熊野物語』（平凡社）
と著作多数

切実に

中上紀

生半可な気持ちでは書くことがかなわないのが小説なら、生半可ではない思いとは、どういうことなのか。この十数年、そのことを常に考えながら、ただがむしゃらに文字を紡ぐことを繰り返してきた。

第八回まほろば賞の候補六作を読み、あらためてまほろば賞とその問いを突き付けられた。切実な、という言葉が、脳裏をぐるぐると回る。

「うずみ」であった。まず、いったい、いま活躍している数多の小説家のうちの、何人が、このテーマを扱うことが出来るのだろうか、と思った。高度成長時代に至る前の、苦しかった戦後日本の裏で、敗戦の向こうに葬ったハマガマがしるい記憶を抱え、帰還兵の夫と共につましい日々の暮らしを営む一人の若い女を、著者は繊細にしてかつ匂い立つほどの肉感的な筆づかいで書き上げた。

タイトルが目をついた。読んだ当時、お恥ずかしながら私はうずみという福山の郷土料理についての知識がなく、うずみ、うずめるといふ響きに、何やら秘密めいた匂いだけを感じ取りながら、読み進んだ。しかし、うずみの正体がわかってくるに連れ、私の嗅覚は第六感的に正しかったのだと

思うようになった。瀬戸内海の鯛や海老をはじめ、新鮮な野菜や松茸などの豊かな食材で作られた贅沢なおかずを、ご飯で覆うように隠して食す「うずみ」は、まさに「埋める」から来ているのだった。

埋める。そう、「女」こと小夜は、戦争の記憶を封印した。おいしいものをご飯で隠すうずみのように。あるいは小夜が隠したいのは、彼女の中で目覚めたばかりの女そのものかもしれない。間借りしている古寺の催しを手伝う小夜が恥じらう、冬も近いのに足袋を履かない素足。夫が実家の母のもとへ戻ったため一人寝の蒲団に潜った際に持て余す、火照った身体。女としての熱い芯のような何か。それは、平和で豊かな時代であれば、何の迷いもなく存分に解放されるはずのものであろう。時勢の厳しさや貧しさは、小夜の「女」を、うずみのように閉じ込めてしまおうとする。元画家の夫は優しく、働き者だったが、赴任先の戦地で見た、餓死した数多の兵隊の記憶に悩まされ続けている。そして、夢なのか現実なのか、小夜は姑が暮らす山の小屋で、異形の者のように姑の乳にむしゃぶりつき、激しく交わる夫を見てしまう。へん蜷を食うて、蛇を食うて、(中略)さあ、吐いてしまえ、おかやんの腹の中へへん蜷やあ子を食うた！赤子を食うた！わしゃ鬼じゃ鬼じゃ、助けてくれえ！ささらには、小夜は自分の生霊と夫が交わる姿も見、出口のない快楽が自らの内部で膨れ上がるのを感じる。

狂気も、悲しみの記憶も、うずみのように閉じ込めたまま、六十数年が経った。レトルトの「うずみ」にがっかりする主人公が印象的だ。これの良いのかという問いを、当時をリアルタイムで生き、米寿を迎える著者に突き付けられた気がした。

他、候補作品では特に尾本善治氏の「蟹」と美月麻希氏の「鳩の血」が際立っていた。

「蟹」では、なぜか部屋中で蠢いている蟹の描写、潰された蟹の生臭さが、へ奇形の唇を持つ主人公の社会的弱者という立場とある種の得体のしれなさ相まって、強烈な印象を残した。瀬尾という女との性的なシーンは書かれていないが、小説全体に満ちる蟹のにおいそのものがいわば性描写であろう。独特の色香を感じる小説だった。



こはま きよし
1950 沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87 作家中上健次に師事、マネージャーを務めるかたわら文学修行
88 「風の河」で文学界新人賞を受賞
他の作品に「消える島」「後生橋」「光の群れ」「火の闇」などがある

力作揃い——「蟹」と「訣別」

小浜清志

村上春樹がノーベル文学賞から外れたというニュースを聞いて残念には思ったが、日本文学の裾野は広いと実感した今回の選考であった。

全国津々浦々に同人誌があり、作品が誕生し、文学談義が繰り広げられていると想像するだけで、文学信奉者の一人として胸弾むことがある。さて、今回で八回目となる全国同人雑誌のまほろば賞であるが、候補作六篇はいずれも力作揃いであった。私は最初全作品に目を通したとき、「蟹」と「訣別」を最有力としていた。そして目を置き再度読み直して思ったのは「誰も知らない部屋の皮膚」「うずみ」も捨てがたいものだというところだった。選考当日の朝、三度目の頁をめくりながら、やはり「蟹」を積極的に推そうと決めて会場へ向かった。

電車を三度乗り継ぎながら同人誌時代のことに想いを巡らせていた。親友であった故河林満に半ば強引に連れて行かれた同人誌の合評会は衝撃だった。それまでは独りで淋しく原稿用紙に向かい出来上がると投稿という全く孤独な作業であったが、合評会は特に感情的になる場面はあっても終始小説という題材を元にして各自の赤裸々な思いが開陳され人的交流も育まれる。書くことは孤独であってもそれも分かち合う場が私にとっては

「鳩の血」は、一つの小説の中に複数の関係性が詰まっており、想像が広がった。とりわけ、マーというばあやさんに育てられた主人公の背景が興味深い。アジア的な要素を多分に含んでいるこの著者に今後も注目したい。

最後に、「文学とは人間が生きるために自由と幸せを求めること」との、中山茅集子氏の言葉で締めくくらせていただく。生きること、そのために幸せと自由を求めること。それ以上に「生半可ではない」ことなど、あるわけがない。切実に、受け止めたいと思った。



同人誌であった。しかし、ある先輩から中央文壇に出て行こうとするならここは早く卒業した方がいいというアドバイスも私は深く理解した。結局二年足らずで同人誌からは離れたが、今でも当時の会員とは付き合いがあり、私も同人誌から小説を学んだ一人であるのだと回想しながら会場に入った。

選考は、文芸思潮に掲載順に進められ、最後に五本の持ち点で投票となった。一位は「蟹」であったが、一点差で「うずみ」が続き、再び論議が始まった。長時間の選考で私としては一刻も早く決着をつけ、喉を潤したかった。勿論両作品とも長所あれば欠点もある。だが、私は両作品の大きな違いは枚数ではないかと考えた。「うずみ」は三十枚であるが、「蟹」は百枚余である。客観的に見れば三十枚と百枚では圧倒的に多い方が有利であるはずである。しかし、「うずみ」は枚数の不利を凌駕した熱があると感じ、私は、賛成票に加わった。

さて、最優秀賞になった「うずみ」は現代から過去、そして現代へ戻るといふ額縁のような構造があまりにも陳腐ではあるが、作者が意図している「うずみ」はまさに正鵠を得ている。道徳には縛られない欲望、規制をくぐり抜ける悪知恵、人倫を逸脱した悪行、人の世にあふれている「うずみ」を、負の遺産である戦後という設定で抽出しようとしていることは成功している。古い時代、町の領主が、節約令を出したとき、住職の妻が考案したという「うずみ」は一見白米にしか見えない碗の底に馳走をうずめるという郷土食であるが、それを比喻として戦地で傷ついた夫の心の歪みを描写するその筆力は同人誌で鍛えられた、いぶし銀のような輝きを見せつける。

「訣別」は構成も筆力もすべて及第点を越えている作品だと思ふ。例えば名のある作家の名前でこの作品を発表したとしても、読者は何の違和感もなく頁をめくることがあろう。

洗練された作品であることは確かであるが、読み終わった後の感動が薄いのには乳癌という重い出来事も、父の裏切りに対する感情も掘り下げることなく訣別という形で終わったことであらう。

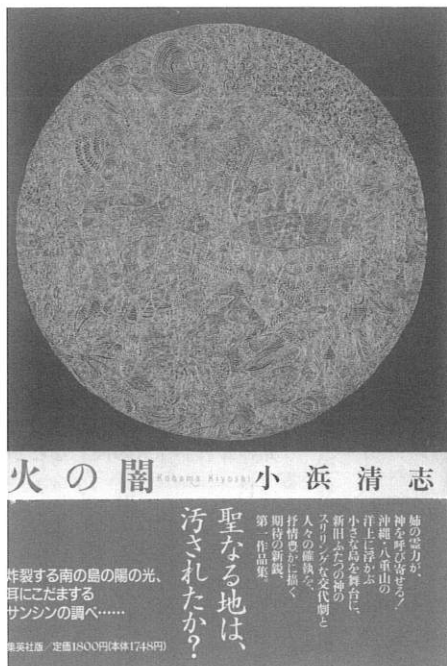
「ゼロ時計」は素材の良さからいって候補の中で最も良かった。導入部

は、思わず読み返してしまうインパクトがあるが最後までそれが単なる一発の花火になってしまったことが悔しい。ゼロ時計という多分これまでなかった異世界へ案内してくれるかという期待は充たされなかったことが残念だった。

「誰も知らない部屋の皮膚」は独自の完成された文体で心地よく読み進めることができた。あえて結末を見せなくても成立する作品であったらう。不明は不明のままでも作品の奥行きは出せるものだ。

「鳩の血」の作者は書くことを非常に愉しんだのではないかと思うほど、読者は置いてきぼりにされたままであっても、自由奔放に作品は展開されている。手綱を握るアドバイザーがいれば、この作者もはもつと優美に原稿用紙の上を走ることができただろう。

「蟹」は鮮烈な作品である。蟹と主人公の兎唇が絡んでいるあたりまでは頁を捲るのがもどかしいほどの興奮を覚えた。筆力は静かにひしめく蟹を描ききっていた。瀬尾京美という女性も蟹のように描けていたら満場一致で最優秀賞に選出されていたであろう。この作者の物を見ようという姿勢は読んでいて清々しいし、何よりも腕力のある筆づかいはこれからも新しい作品を耕してくれることだろう。



の暗鬱な宿命を剔出してしている。蟹のようにただ潰され殺されるものとしての存在を現代社会の中に描出した手腕は、注目に値する。今後さらに書いていくべき領域を持ち、どのように現実や世界と対決していくのか、第二作、第三作を読んでみたくなる可能性を感じる。このポジションで書き続けるのは苦闘を強いられるだろうが、逃げずに対決してほしい。

「鳩の血」は選考会で予想以上に注目され、その長篇の構想の大きさが評価された。矛盾や破綻はたくさんあるが、とにかく前へ展開していくストーリーのダイナミズムは大きく、不思議な魅力を帯びている。この展開力と構築が一つの整合性のうちに噛み合ったときには壮麗な小説世界が実現しそうである。齟齬はあっても今はその奔放な展開力を抑えるべきではなく、のびのびと筆を伸ばしていくべきだろう。そのほうがこの才能は開花するはずである。めずらしい長篇小説の才能を見せている点で、現代の世界にどのような虚構世界を打ち建てていくか楽しみである。

北川朱実氏の「だれも知らない部屋の皮膚」は、着想がよく、ゴミのストーカーの姿の見えない恐怖を、現代の孤独な生活に重ねてうまく抽出している。確かに排出物によって浮かび上がってくる生活がある。何をするか、何を取り入れるかという正の側から見る生活ではなく、何を捨て、何を排出したかによって見える生活の姿がある。その盲点をうまく突いて、見つめられている現代の恐怖を抉り出している手腕は、卓越している。詩人の感性も文章に生きていて、言葉の連なりに贅がある。現代の孤立した生活に肉薄している。惜しくも賞を逃したが、力量のある作家なので、さらに次作も期待したい。

「訣別」は、緊密なよく整った文章は気持ちがよく、完成度の高さを示している。選考委員全員が力を認めていた。逆にそれがゆえに、まとまっている端正さも一つ何かほしい欲求を抱かせた。これはこれで一つの佳品としてのたまたまを備えているので、荒っぽい作品の中に置くこと目立たなくなる点で損をすることは否定できない。和風建築の廊下の一隅の一輪挿しの花のような観賞によってこそ、その趣を深くするのかもしれない。

「ゼロ時計」も発想力のよさは抜群で、内臓チョコレートや、生命力によ



いがらし つとむ

戦争の暗黒面と現代の疎外感

五十嵐勉

第八回のまほろば賞候補作の六編は、力作揃いだったが、最後に残ったのは「うずみ」と「蟹」だった。「うずみ」は戦争の暗黒面を象徴的に扱い、「蟹」は現代の疎外感を重く掘り下げていて、甲乙つけがたく、最後まで議論が続いた。二作に贈ることも考えられたが、一貫して戦争をテーマに女性の立場から書き続けた中山茅集子氏の長年の姿勢が評価され、「うずみ」に決まった。心から祝意を送りたい。

「うずみ」はご飯の下にいろいろなおかずを隠していて、それを掘り起して食べる圧政下に工夫された郷土料理。これが町おこしのタネとして現代に再浮上するのを契機に、主人公の中に終戦直後の混乱が再現される。戦地帰りの男たちの飢餓や人殺しの体験を女性の肌や感覚を通して触知するとき、生々しい戦場の残酷がいつそう露わに蘇ってくる。その狂気が母親が包み込むように癒すが、いつそうその渦が悪夢としてひろがっていく。戦争の実相をさりげない郷土料理のなかに鮮やかに描き出して、優れた短篇として結晶している。中山氏は女性の立場から一貫して戦争を書き続け、その姿勢は揺るぎないものがある。今回の作品は特に現代と戦争とを繋いで見事に結実しており、一つの到達点と見た。

尾本善治氏の「蟹」は、沈鬱で孤独な現代の疎外感を、生きにくさの根底にまで迫ってよく描き出し、追い詰められる者、生から遠ざけられる者について喚起される別な時間の存在など、ドキリとする着想は、牽引力がある。ただ、それを乗せる舞台が窓際集団であったり、ありきたりな恋愛であったりする小市民的な世界に留まっているので、着想が生きず、小規模なサラリーマン生活の中で萎んでしまう。この素材はもつと大掛かりな舞台を設定することによって初めてダイナミックに動き出すものだろう。大胆な設定に挑戦してみたい。ゼロ時計の着想は、これを下敷きにしてもつといるような事件やいろいろな場所を展開できる。シリーズとして重ねていくことで、さらに「もう一つの時間」の姿が明らかになってくるだろう。連作が生きる素材である。

同人誌のなかには、力のある作品、埋もれた作品がたくさんある。書き手はもつと自信を持って、同人誌でなければできない挑戦をしてみたい。商業誌は真の創造の力をもう失っている。大手の商業文芸誌の時代は終りに近づいている。新しいものは、現代に生きて日々の苦闘のなかで何かを生み出そうとするそれぞれの書き手の真摯な掘削力の中にある。新しい時代の文学をそれぞれの苦闘の手によって力強く開けてほしい。

第7回健友館文学賞大賞受賞!

「彼らは何を語りたかったのか」

タイ・カンボジア国境の難民村。惨劇した戦争で崩壊した多くの死体が散らばっていた。



尾本善治

おもと よしや

- 1978 大阪市生まれ
尼崎市で育つ
- 96 兵庫県立尼崎稲園高等学校卒業
- 2000 大阪文学学校入学
- 01 大阪文学学校修了
『白鴉』入会
- 02 『白鴉』10号にて「夜明けの岸辺」掲載
- 03 『白鴉』13号にて「冬」掲載
- 08 『白鴉』22号にて「蟹」掲載
- 11 筆名を現在のものに改め、26号に「雪の日」掲載
- 14 28号に「三十歳」掲載（のち「蟹」に改題）

幼少のころから賞というものはもちろん、ほめられることに無縁だったせい、か自己評価が低く、今回も、優秀作に選んでいただいた時点でこれ以上のことはないだろうと、自分としてはよくやった、おかげでいい夢を見させていただいた、という気分でした。幸甚にも特別賞をいただくこととなり、驚きとともにたいへん嬉しく思いました。

この作品は『白鴉』に所属して以来ずっと掘り下げつづけてきたもので、まだまだ至らない部分、書けていない部分はいくつかあるものの、こうして高い評価をいただいて、これまで十年以上この『白鴉』で文学活動をつづけてきたことへの一つの成果を出せたと感じています。もちろんこれで終わることはなく、これからは、皆さまからいただいた高い評価を信じて胸に刻み、よりよい文学作品を創り出せるよう研鑽をつづけることを誓います。

特別賞 受賞の言葉

尾本善治



中山茅集子

なかやま ちずこ

- 1926 北海道札幌市生まれ
- 44 広島県立府中高女卒
- 76 「蛇の卵」にて中央公論第19回
女流新人賞受賞
- 77 より97年まで「井上光晴文学伝習所」に学ぶ
- 88 同人誌「ふくやま文学」創刊
- 97 より同人誌「クレーン」に小説を投稿
- 2008 「魚の時間」でまほろば賞優秀賞受賞
- 10 「もう一つのドア」でまほろば賞優秀賞受賞

「まほろば賞」優秀賞の他の作品が百枚を越える労作の中で「うずみ」は三十枚そこそこの短篇である。肩身の狭い思いでいただけに、受賞の報は心底嬉しかった。

同人誌での修行経験もなく、五十歳を前にして小説を書き始めたとき、九州佐世保で「井上光晴文学伝習所」の旗揚げを知り飛び込んだ。開口一番、井上さんの言葉を忘れない。

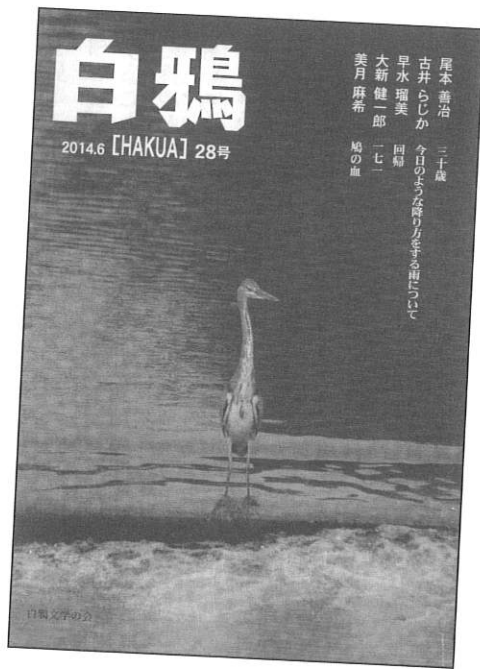
「自分自身の強力な文学原体験を持つこと」

井上文学の炭鉱体験に並ぶものであろうか。書き続ける中で想像力が衰えた時、そこに反することで力を与えられ、決して風化するのではない強固な場所。私はそこを「戦争」とした。受賞作「うずみ」は備後に伝わる郷土食だが、食から書き起こした物語が母子相姦に行き着いたとき、私の戦争悪がマガマになり噴きあがるのを覚えた。そして同時に米寿を越える歳まで書き続けてきた「私の戦争」の終焉を見た思いでもある。あらためて、ご推薦下さった選者の方々にお礼を申しあげます。

まほろば賞

受賞の言葉

中山茅集子



美月麻希

みつき まき

- 1960 神戸市生まれ
- 83 徳島大学医学部栄養学科卒業
大塚化学株式会社農業研究開発部を経て
現在 株式会社リヴァイヴにて経
理責任者
- 2004 大阪文学学校入学（学友にて
在籍中）
- 07 白鴉文学の会入会
大阪女性芸芸協会会員
『白鴉』掲載作：「テネシーワ
ルツ」「蛇の衣」「揺れるワンピース」
「女たちの宴」「芝生に寝転
び空を聴く」「銀色の雫」

五十嵐勉賞

受賞の言葉

美月麻希

白鴉28号を発行して間もなく、「芸芸思潮」の全国同人誌優秀作に選ばれ転載されると連絡がありました。まったく実感がありませんでした。今年は小説を書き始めてちょうど十年を迎えた節目の年です。何か結果を得るぞと昨年末に何のあてもない決意をしましたが、まさかこういう形で現れるとは思いませんでした。

私の作品は中途半端で、純文学ではないと散々合評会で指摘されてきました。しかし悩む暇があったら『鳩の血』を含む三部作を思う存分書こうと決めたのでした。今までの思いが凝結した作品に好意的な批評をいただき、大げさではなく嬉しくて泣けてきました。

こんなことは二度とない、幸運だったことを喜ぶことにしました。メールやSNSを通じて、知り合いや文学仲間四百人以上を巻き込み、大騒ぎでした。お祝いの言葉を強要し「芸芸思潮」を買ってもらいました。候補作をすべて読み「まほろば賞」に拙作が入りこむ余地はないと判断していたところに「五十嵐勉賞」受賞の連絡をいただきました。さて、もう一度大勢に迷惑をかけるべきでしょうか。

十年でこれほど大きな糧をいただけ、しばらく餓死することなく頑張っていけそうです。読んでいただいた選考委員の皆さまはじめすべての方に心からの感謝を捧げます。ありがとうございました。

2014 第8回
全国同人雑誌最優秀賞



まほろば賞

選考委員

三田誠広・中上 紀
小浜清志・五十嵐勉

※候補作6篇は「文芸思潮」56号に掲載



読者賞投票もあります●詳細は次ページを御覧下さい。

新しい日本文学の潮流を

同人雑誌から

全国同人雑誌最優秀賞
まほろば賞

新しい日本文学の潮流を

同人雑誌から

全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞



読者賞

第8回全国同人雑誌まほろば賞読者賞投票用紙

| | | | | | |
|-------------------------|---------------------------------|---------------------|--------------------------|--------------------|---------------------------|
| ⑥ | ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| 「ゼロ時計」 辻村仁志「空とぶ鯨」14号 | 「だれも知らない部屋の皮膚」 北川朱実「文芸中部」90号 | 「訣別」 木戸博子「石榴」15号 | 「鳩の血」 美月麻希「白鴉」28号 | 「蟹」 尾本善治「白鴉」28号 | 「うずみ」 中山茅集子「ふくやま文学」24号 |
| 点 | 点 | 点 | 点 | 点 | 点 |
| 持ち点 ●金額の 1/100 | 氏名 | TEL | | | |
| 住所 〒 | 文芸思潮定期購読の方は ○をご記入下さい | | 同人雑誌振興会会員の 方は○をご記入下さい | | |

読者賞に投票する方はこの用紙を切り取るか、コピーして点数を記入し、郵便為替同封の上、8月15日までに、まほろば賞係宛てにお送りください。※点数の合計が持ち点となるようにつけてください。(1000円の方の持ち点は10点です) 一作に限らず複数作品を賞金に当てていただきます。

全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞改訂

●全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」

全国同人雑誌振興会および文芸思潮では、文芸同人雑誌の振興と創作活動の奨励を図るため、全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」を創設します。これにより、同人雑誌で活躍される方々の創作エネルギーを鼓舞し、優れた同人雑誌の作品を、文芸を愛する人々に広く読まれる運動を展開していきたいと存じます。

●全国同人雑誌最優秀賞の選考過程 (改訂)

- ① 全国同人雑誌振興会選考委員会および文芸思潮編集部により、同人雑誌に掲載された作品のなかから優秀賞を選び、文芸思潮に掲載する。これに同人雑誌優秀賞を贈り、さらに選考の上6篇前後を最優秀賞選考の候補作品とする。優秀賞には賞金1万円と賞状・記念品を贈る。
 - ② 毎年選考委員による選考会を行ない、候補作品について十分な討議を重ねたのち、最優秀賞を決定する。
 - ③ 最優秀賞「まほろば賞」は一人が原則だが、複数もありうる。
 - ④ 次点には特別賞を授与する。
 - ⑤ 選考委員は別に賞を授与することができる。
 - ⑥ 全国および海外からの送付による投票により、「読者賞」を決定する。
 - ⑦ 読者賞の投票は選考会1週間前までに行う。
 - ⑧ 最優秀賞には10万円の賞金と、賞状、記念品を贈る。(賞金は、できるだけ有志の寄付を募り、その寄付金によって、運営する)
 - ⑨ 最優秀賞選考結果を「文芸思潮」に発表する。
 - ⑩ 優秀賞を4回受けた作者には「まほろば作家賞」が授与される。
 - ⑪ ポピュラー(大衆)部門、評論部門も設ける方向で整えていく。
- この全国同人雑誌賞「まほろば賞」は、文学を愛する方々の賛同と御協力によって運営されていく新しい賞です。ぜひ読者賞に投票されて奮って御参加いただきたいと切にお願いするしだいです。

2013年6月24日 (改訂)

全国同人雑誌振興会
文芸思潮



※1口1000円からですので、2000円の方の持ち点は20点となります。30口まで可能です。102
●送り先 〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社 まほろば賞読者賞係

うずみ

中山茅集子

近頃この町の郷土食「うずみ」が町おこしの目玉として浮上していることに、女はなにやら胸騒ぎをおぼえた。負け戦から六十六年が経つ間に「うずみ」はほとんど忘れ去られていたのに、何をいまさらとうそ寒い気もした。

「うずみ」への何がなしの胸騒ぎは、負け戦からの長い歳月と自分の年齢を重ね、あの飢えの季節がとうに終わり、世はあげて飽食の時代と言われていることから、人は飽食と美味を知り尽くすと昔々の素朴な食をようやく思い出さらしいと納得はしても、まがまがしさが消えたわけではない。

師走を前にしてのある日、女は最寄りの和菓子屋を訪れた。間口二間ほどの手狭な店を若い夫婦が営んでいたが、

周りが危ぶむまでもなく最賃がついて季節の菓子も増え、和菓子屋には不向きと思われていたモダンな嫁さんもそれなりに溶け込んでいる。

一人暮らしの女にもふらりと訪ねてくる友人がいて、この店の季節の菓子は喜ばれるのだった。苺大福、栗大福、豆大福、みたらし団子などに迷いながら、ふと上げた目に柵に並んだ「うずみ」のレトルトを見た。

「あれは『うずみ』やないの」

レジの前に立っていた嫁さんがすかさず「はい、そうです」と応じてから、

「初めて置いたんで私もまだ試食しとりませんが、今流行りのもんらしいですよ」と言う。

込みどの家も膨れ上がる中で、寺の講師部屋が借りられたのは幸運だった。

本堂裏の抹香臭い講師部屋を新所帯として暮らし始めてからひと月が経ち、師走に近いその朝、初雪を見た。

「今日から報恩講が始まるんよ、ほら、もう庫裏で手伝う声が聞こえる、政男さん、放してよ」

抱え込んでいる夫の手から脱け出そうと小夜がもがくと、手はいつそう小夜の細い体を締め付ける。

「あんただって今日は山小屋へ行くんでしよう、おかあさんが待つとんなさるに」

「どうせ、あつちに二、三日泊まるようになろうけ、急がんでええ。今年の年越しは小夜も一緒にお袋んとこでするつもりだ、お袋も喜ぶじゃろうけ」

体のあちこちに夫の手の感触が残るのを振り切るようにして庫裏の台所に走りこむ。広い台所にはすでに檀家の女たちが同じ白の割烹着姿で立ち働いていた。走りこんでまだ息を荒くしている小夜を目敏くみた近くの農家の古女房が、耳元で「新嫁ごは朝起きが辛かろうがね」と粘った声でささやく。

「夫は疾うから畑仕事にいきましたけん」

「へえー、お宅はゲイジツカたら聞きよったが、百姓じやったんね、へえー」

大げさに仰け反って見せるのに、負けん気で言い返す。

「今流行りねえ」

女は菓子のケースから柵へと移りレトルトの「うずみ」を手にとった。町おこしのイメージたつぷりに誇張されたレッテルに釣られるようにして一袋買った。初めから期待していたわけではなかったが、やはり思惑通りだった。だが、失望の煽りが女の中に埋められていた過去を甦らせ、思いがけなく輪郭を鮮やかにしていく。

あの頃は人が人でなく、人の形をしているだけで、まともな五体か生き霊なのか分からぬ有様だった。中でも玉碎といわれた南の島から辛うじて帰還してきた兵隊は死んでいった仲間の生き霊を背負っていた。女は今も信じている。生き霊に執り付かれていたのは兵隊ばかりでなかったと。そうした男と夫婦になることで女もまた我とわが身を二つに裂くのだと。女の名を小夜という。そして今は亡き連れ合いは政男といった。

夫の政男を送り出したあと、小夜は手早く割烹着をつけて庫裏の台所へ向かった。朝早くから、本堂裏の講師部屋にまで庫裏のざわめきが届いていた。かつては寺巡り説教師の寝泊りに用意された部屋が不要となっていたのを小夜の夫婦が間借りしていた。敗戦後の田舎町に外地から雪崩れ込んできた人たちにとって、住居は食料に勝る切実な命綱だったから、ともかく親戚と名がつくだけで強引に割り

「お姑さんが八反田で畑をしまられるけん、手伝いに」
 言い終わらないうち座敷から小走りにあらわれた寺の奥さんに小夜は手招きされた。

「台所は人手が足りとるから、小夜さんは座敷へお茶を運んでくだらんかね」

驚いている小夜の尻を古女房が叩いて言う。

「はよういきんさい、新嫁ごは目の法楽じゃけん、座敷の坊さんかて喜ばれようで」

果たして、竈や洗い場の辺りから笑い声が上がる。寺の集まりに色気話は身内のキズナともなるらしい。新嫁ごは檀家の女らをくすぐる標的なのだ。小夜は足裏を翻す歩きようで座敷に向かいながら、はっとした。素足のままであったからだ。手足のぬくい小夜は冬でも足袋を履かずに通す。勝手仕事を手伝うのなら素足でもよからうが座敷へあがるにはさすがに気が引ける。紺緋のモンペの先に薄赤く染まった指先が反っていた。

奥さんから煎茶の香りがほる盆を渡され、一瞬ためらったが座敷へと向かった。十畳ほどもある奥座敷にはこの寺の院主をはじめ別寺から招かれた坊様、檀家総代や世話役の面々が和やかに談笑していたが、茶盆を捧げて入ってきた女に気づいて目を止めた。とっさに素足をとがめている、と小夜は思った。

「今日のご苦勞ですな」

（住職の妻）が思いついたのだと言う。

年に一度の寺の祀りぐらいは日ごろ世話になる檀家の人らに美味しいものを振舞いたい。思いついたのは、椀の底に入れた具を上から飯をかぶせて隠すものだった。椀の蓋をとれば只の飯だが、箸をつけるととりどりの具が現れる仕掛けなのだ。祀りは松茸の採れる時期と重なり、檀家持ちよりの野菜に海老や豆腐が入る。椀に入れた具の上から炊き立ての飯をかぶせて薄味の汁を注ぎ、仕上げに柚子の一片をのせる。

「おいしい！」

小夜はほとんど叫ぶように言った。町屋暮らしで寺にも縁の薄い実家で「うずみ」を食べた覚えがなかったからだ。

「あんた、うずみを知らなんだかね」

松茸を頬張りながらおなごしと言う。

「はい」小夜は素直にうなづく。とっさに、夫は知っているかしらと思った。雑穀混じりの雑炊でしんでいる日々で、報恩講の夕餉の馳走「うずみ」は小夜を幸せにしてくれた。

本堂裏の部屋に戻ったときは、とつぷり暮れていたが雪は止んでいた。それでもすぐ裏手まで迫る山肌にも庭木にも綿帽子は消え残っていた。それを見たときやつと思いだしたのだ。夫が可愛がっていた籠の雲雀を朝の晴れ間にだまされ庭木へ吊るしたままだったのを。慌てて部屋に運ぶ

敷居際に突っ立っている小夜に院主のねぎらいの声が出て、弾かれたように足が前に出た。床の間を背に座る坊様から順に茶をすすめながら、足裏を見られている居心地の悪さがつきまとう。末座に来たとき、

「冷とうないんかのう」

野菜を届けに庫裏へ足しげくやってくる世話役の一人が覗き込むようにして言う。今しがた小夜をからかった女の連れ合いだった。さすがに今日は野良着を背広に着替えている。

「あ、すまんことです、無作法なことです」

小夜が背をこごめて詫げるのに、

「なあに、詫びるこたあいらんよな」

と片手を振るのに続いて、

「若けえうちは足の先まで火照るけん、わしらかて覚えがあるうが」

つい隣の紋付羽織の男が割り込み、さざ波が立った。

「すまんことです」

もう一度頭を下げると足裏をひるがえし座敷をあとにした。抉れた土踏まずに鋭い痛みが走った。

昼のお斎から始まり三時のお茶、夕餉の「うずみ」はお台所のおなごしたちの係りだった。夕餉の「うずみ」はおなごしらにも振舞われ、小夜には初めての郷土料理だった。かつてこの町の領主が節約令を敷いたとき、寺の大黒

と、雲雀は縮めていた体を震わせ身づくろいした。小夜はご免ご免とあやまりながら、小さな頭に雪帽子が残っているのをそっと指で払う。

今朝方慌てて庫裏へ駆け込んだので、敷きっぱなしの夜具にもぐりこむ。冷え切った中に体を二つ折りになっていると、うずみで温もった体温が戻ってきてうとうとする。一日中庫裏で立ち働いた疲れが溶け出して、女に目覚めたばかりの小夜からだを膨らませていく。際限もなく膨らみ体中の皮膚が透明になると、ふわりと宙に浮いた。

暗い山道を辿っていた。からだの芯が燃えるように熱いのはうずみのせいだ。昔々の人たちは凄くことを思いつくものだ。ありつたけの珍味を白めしで隠して祀りを祝う。のう、殿様がお釈迦さんでも気がつくくめえよ。わしらがこげな旨えもんを食うとるなんてのう。そげんこっちゃ、白めしの下からほれ見い、出よるわ出よるわ、ほう、この松茸を見い、噂あが肝をつぶすぞ。

この道はお姑さんの小屋へいく道や。たった一度政男さんに連れてってもらった。八反田いう山の開拓村に一人暮らしで畑をしようなさる。

「おかやん、嫁を連れてきたけ会うてやつつかあさい」

山小屋の戸口に出迎えた母親にあの人は言った。

「おお、こげん山ん中によお出でた、町暮らしの嫁ごに

や山道がきつうあったらう」

「この人が姑になるんや、と恐る恐る頭をこごめると言った。「よろしゅうお願いします」

その日から、私と政男さんとお姑さんは繋がった。子供時分の電車ごっこみたいに紐の輪っかにすっぽりと入ったのだ。開拓村といつてもせいぜい十五、六軒ほどの集落だった。この国の負け戦をはさんで植民地から逃れてきた人、空襲で家を焼かれた人たちの寄り合い所帯は、ともかく雨風しのぐ小屋を建て、腹を満たす芋や菜っ葉を実らせる日々で生き延びている。

「わしが造った小屋ど。えかろうが」

あん人が自慢げに言う荒削りの羽目板小屋は、雨風防ぐに充分の住まいだ。板の間に莫塵を敷き詰めただけの部屋ん中も、私と政男さんの住まいよりはよほど居心地がよかったんはなんでやる。そんなあったかい、親一人子一人の暮らしから政男さんを引き離れたんは私のせいやったかもしれんなあ。

「私ならお姑さんと一緒に暮らしていいんよ、畑仕事も教えてもらえるし」

でも政男さんは、折角見つかった仕事場が山を降りて更にバスで三十分かかる町なかであることを理由に、私と二人だけの所帯を選んだ。その代わり仕事の手が空いた時は山小屋に行き、畑仕事を手伝うことに。

山小屋へ行く政男さんに「私も一緒に。お姑さんのお世話をしたいから」と言うたびに「お袋はまんだ元気じゃし、先で足腰立たんようになれば、どうでもあんだに世話を頼まないけんが、今はまんだわし一人で充分じゃ」と取り合させまいとの気持ちと思えばいとおしくて、一人寝の淋しさも我慢できる。

それなのに、今夜はなぜこうして山小屋への道を辿っているのかしら。恋しくて、一人寝に我慢がでさず追いかけたのだった。もしかして、うずみのせい？ 炊き立ての真っ白なご飯の下から現れるとりどりの旨さが私の中にひそむとりどりの何かを誘い出したにちがいない。きつとそうだ。とりどりの何かを誘い出すのは政男さんだもの。

山小屋の灯りが見える。今ごろは親子差し向かいで晩御飯を食べているだろう。塗りの剥げた小さな卓袱台には、今日の収穫の白菜鍋か大根の髓甲煮がのっているに違いない。大根に煮干と砂糖醤油を絡めながらじつくりと髓甲色に煮上げるあれは、私にはどうしても真似ができない。

「若えうちは気が急ぐけん、わたしらみてえな年寄りには、竈の前えにじつくり構えて鍋の番ができるけん、こん色は年季の色じゃ」

お姑さんはそう言うて下さったが、政男さんの好物とあれば、なんとしても近づきたいものだ。

膨らみの中から幽かに聞こえてくる啜り泣きは、お姑さんか、政男さんか。それとも鬼か？ いいえ、あれは政男さんの声、地獄を思い出しているの呻きにちがいない。

寺の報恩講が終わると、いっさんに冬が爪先立った。

「そうか、初めてうずみを食べたんか、うまかったらう」
山小屋から戻った夫に小夜は一番にうずみのことを報告した。ただ、報恩講の晩のことは黙っていた。これまで夫に隠し事をしたことはなかったが、あの晩のことが夢だったかどうか、自分でもわからないのだ。かといって、真夜中の深い山道を一人迷わず正気で小屋を訪ねることなどあるうか。もしもこの世に、嘶に聞く生き霊なるものがあるのなら、あの時の自分は生き霊だったのかもしれない。報恩講といい、うずみといい、小夜には生まれて始めての仏事だった。町外れの小さな真宗寺だが、何時の時代に開山したとも知れぬ古寺に居ては、生き霊などという世迷いことも信じるようになるかと小夜はおびえた。

正月にはゆつくりと山小屋で過ごすことになり、夫はせつせと町の仕事場へ通う。この国に大きな戦争が始まる前は画家を志していたが、十五年もの間を戦地で明け暮れたあげくにニューギニヤとかいう南の島で負け戦。何万何十万もの兵隊が餓死するなかに生き残り、故国に帰ったのが果たして幸せだったか。画家になる夢など焼け跡の灰の

おお、やっぱり。思ったとおりだ。一間だけの小屋に四十ワットの裸電球が点り、その下の卓袱台には井に山の髓甲煮が。声までは聞こえないが、母親と息子はなにやら楽しげに語り、頭を反らして笑っている。どちらの顔も夕焼け色に染まっている。お姑さんは息子がやってくる日のために町へ降り、山羊の乳を焼酎に代えて待っているのだ。ほら、あんなに面白おかしく笑っているさる……。

「政男さん、私よ、お姑さん、嫁の小夜ですよ。戸を開けてください」

私は小屋の戸をほとほと叩く。叩き続ける。

「百万遍叩いたってだめだ、おまえは異界に踏み迷っているのだから、ここから先には入れんのだよ」

「え、誰なの？ 今の声は。この中には私の夫とお姑さんがいなさるんよ、嫁の私が入れんやなんて、そんな馬鹿なことが」

「あの二人は、母でも息子でもない、おまえには関わりのない者たちなのだ。帰れ、帰れ」

「教えて！ それじゃあ小屋の中の二人は誰なの？」

「うむ……。鬼かのう」

「今なんて、もう一度言うて！」

鬼じゃ、オニ……。

気がつくとも小屋の灯が消えていた。それなのに小屋の中に満ち溢れる何かが外の暗闇を押しつけて膨らみ続ける。

中に埋もれたままで。

あの島には大きな川があつて、その川の兩岸に累々と魚が打ち上げられていると見たのは餓死した兵隊たち。遙か南の島を流れる川が三途の川にならうとは。地獄の亡者は生きて故国に帰つた夫の背中に今も張り付いているのだ。

「どうしたの」

あるとき、珍しく夕餉の膳にのつた鯛を見るなり、すばやくその頭を青葉で隠す夫に聞いた。

「思いだすんじや、打ち上げられた魚の頭をな」

ぼつりと言う。小夜は黙つてうなずいた。それからも、夫は魚の頭を葉っぱで隠すのを止めない。

師走も押し詰まってくると、夫の仕事はますます忙しくなり小夜も時に手伝いに行く。桐材の加工が盛んな町では、箆笥など家具の生産が主流だったが、下駄や裁縫箱、小物用の三つ引き小箆笥が復興盛んな京阪神で飛ぶように売れた。夫の仕事は、裁縫箱や小箆笥に絵を描くのだ。戦争が画家への望みを狂わせたが、どん底の暮らして得た絵付けの仕事は有難かった。得意の花鳥風月の図柄は鮮やかな泥絵の具に彩られて「さすが玄人はんは違ひますなあ」と問屋を喜ばせ、夫を苦笑させた。

空襲で叩きのめされ焼け野原の都会では、娘の嫁入り道具に華やかな絵付けの裁縫箱や小箆笥はせめてもの親心だったかもしれない。でも、この仕事は何時までのものか、

なんて

「あつちでえらい目に遭われたと聞いた。どこぞに隠れる時、なにより怖いのが子の泣き声じゃつたそうな」

その折の恐怖が幼い子供に泣きも笑いもできぬ枷をはめてしまったのか。この長屋の持ち主の遠い親戚だと聞いていた。負け戦の満州から命一つで引き揚げてきたのだとも。幼い子供を入れて七人が暮らす中、真つ昼間こそりとも心配がないのは、地獄をくぐり抜けた人たちの生きるすべとなつているのかもしれない。

昼近くになると、さすがに台所で洗い物をする水音がして、母親に催促する幼い子の声が洩れる。子に促されるようにして年寄りの声もまじり、母親らしい苛立った声が続く。

「飯どきになるといつもああだ。わしが仕事をおえて帰るとき、たまに旦那とすれ違ふが、勤め人らしい。いんや、口を開いたことはない、会釈するだけじゃ」

ふいに、子の泣き声があった。押し殺した声で叱りつけ、なだめる母親の声に、小夜はなぜかほつとした。

「今日はお寺の奥さんにいただいた餅があるんよ」

「ほう、そりや有難い」

ようやく上げた顔が腫れぼつたい。彩色された蓋の小山を小夜はいそいそと部屋の間壁に運ぶ。一日の終わりに部屋が受け取りにくる。敷をかぞえて日銭をくれるのだ。今

うつつらと先が見え始めてもいた。備後の田舎町に暮らしていても、この国の激しい変わりようは肌で感じられる。だからといって、その先までは測りようもない。政男と小夜の夫婦にとっては今の仕事にしがみついているしかなかった。

仕事場は田圃に囲まれた二軒長屋の一つをあてがわれ、六畳の間に三畳ほどの板場と台所がついていた。板場と六畳にはうずたかく白木の箱が積み上げられ、その一角に火鉢と絵の具皿が並んでいる。部屋に入るなり膠の獣臭が鼻をつく。小夜はこの匂いが嫌いだ。とはいえ、膠は泥絵の具を溶くのに必要なもので、手伝いはこの膠を炊くことから始める。千本と呼ばれる割り箸の太さの膠を折って水と共に土鍋に入れ、火の上でかき混ぜるうち、どろりとした褐色の液になる。締め切った部屋の中に獣の匂いが満ちるのを待つ一日の仕事が始まる。

裁縫箱は白木の蓋だけが積まれ、夫は片手でくるりくりり回しながら彩色していく。美しい羽を持つ小鳥や花々が白木地を華やかに変身させていくのを見るのは楽しい。傍らで火鉢に手をかざし夫の手の動きに見とれていた小夜がつぶやく。

「お隣は静かね」

「ああ、いつものことだ」

「だって小さいお子もいるというのに、泣きも笑いもせん月はずいぶん根を詰めたから日当も余分にいただけけるだろう、すりやお姑さんに下着の一枚も土産にできる。小夜は火鉢に炭をつぎ足し、餅網をのせると茶の支度で台所へ立った。

正月を控えて夫婦は山小屋へ向かった。小夜の思惑通り日当の割り増しがあり、正月支度の酒肴の土産もできた。夫には内緒で自分と姑の下着を買った。久しぶりの買い物はわくわくするほど嬉しくて、正月を山小屋で過ごすのさへなにやら心が弾む。いつかの夢に見た親子の語らいの中に自分も入り、共に笑う姿が浮かぶ。土産で膨らんだりユツクはさすがに息を切らせたが、夫と並んで歩く足取りは軽い。日が落ちるまでには着くはずだったのに、年の瀬は太陽までが気が急くと見え、頂に間のある辺りから暗くなり始め幕を下ろす素早さでとつぷりと暮れた。開拓村の灯が見えるのはまだ先のようなのだ。

「勝手知った道じゃけ案ずることはない」

口数の少なくなつた小夜の心細さを察してか夫が言う。

「あんたと一緒だもの、平気よ。でもあんたは、いつも仕事を終えてから行きよられたんやから、こんな暗い山道を一人で恐ろしゅうはなかつたん？」

「なあに、わしはもつともつと恐ろしい目に遭うとるけ、

こんな山道ぐらいなんのこともありやせん」

中に埋もれたままだ。

あの島には大きな川があつて、その川の兩岸に累々と魚が打ち上げられていてと見たのは餓死した兵隊たち。遙かな南の島を流れる川が三途の川になろうとは。地獄の亡者は生きて故国に帰った夫の背中に今も張り付いているのだ。

「どうしたの」

あるとき、珍しく夕餉の膳にのつた鰯を見るなり、すばやくその頭を青葉で隠す夫に聞いた。

「思いだすんじや、打ち上げられた魚の頭をな」

ぼつりと言う。小夜は黙つてうなずいた。それからも、夫は魚の頭を葉っぱで隠すのを止めない。

師走も押し詰まつてくると、夫の仕事はますます忙しくなり小夜も時に手伝いに行く。桐材の加工が盛んな町では、箆筒など家具の生産が主流だったが、下駄や裁縫箱、小物用の三つ引き小箆筒が復興盛んな京阪神で飛ぶように売れた。夫の仕事は、裁縫箱や小箆筒に絵を描くのだった。戦争が画家への望みを狂わせたが、どん底の暮らして得た絵付けの仕事は有難かった。得意の花鳥風月の図柄は鮮やかな泥絵の具に彩られて「さすが玄人はんは違ひますなあ」と問屋を喜ばせ、夫を苦笑させた。

空襲で叩きのめされ焼け野原の都会では、娘の嫁入り道具に華やかな絵付けの裁縫箱や小箆筒はせめてもの親心だったかもしれない。でも、この仕事が何時までのものか、

なんて」

「あつちでえらい目に遭われたと聞いた。どこぞに隠れる時、なにより怖いのが子の泣き声じゃつたそうな」

その折の恐怖が幼い子供に泣きも笑いもできぬ枷をはめてしまったのか。この長屋の持ち主の遠い親戚だと聞いていた。負け戦の満州から命一つで引き揚げてきたのだとも。幼い子供を入れて七人が暮らす中、真つ昼間こそりとも心配がないのは、地獄をくぐり抜けた人たちの生きるすべとなつているのかもしれない。

昼近くになると、さすがに台所で洗い物をする水音がして、母親に催促する幼い子の声が洩れる。子に促されるようにして年寄りの声もまじり、母親らしい苛立った声が続く。

「飯どきになるといつもああだ。わしが仕事をおえて帰るとき、たまに旦那とすれ違うが、勤め人らしい。いんや、口を聞いたことはない、会釈するだけじゃ」

ふいに、子の泣き声があった。押し殺した声で叱りつけ、なだめる母親の声に、小夜はなぜかほつとした。

「今日はお寺の奥さんにいただいた餅があるんよ」

「ほう、そりゃ有難い」

ようやく上げた顔が腫れぼったい。彩色された蓋の小皿を小夜はいそいそと部屋に運ぶ。一日の終わりに問屋が受け取りにくる。数をかぞえて日銭をくれるのだ。今

うつすらと先が見え始めてもいた。備後の田舎町に暮らしていても、この国の激しい変わりようは肌で感じられる。だからといって、その先までは測りようもない。政男と小夜の夫婦にとっては今の仕事にしがみついているしかなかった。

一仕事場は田圃に囲まれた二軒長屋の一つをあてがわれ、六畳の間に三畳ほどの板場と台所がついていた。板場と六畳にはうずたかく白木の箱が積み上げられ、その一角に火鉢と絵の具皿が並んでいる。部屋に入るなり膠の獣臭が鼻をつく。小夜はこの匂いが嫌いだった。とはいえ、膠は泥絵の具を溶くのに必要なもので、手伝いはこの膠を炊くことから始める。千本と呼ばれる割り箸の太さの膠を折って水と共に土鍋に入れ、火の上でかき混ぜるうち、どろりとした褐色の液になる。締め切った部屋の中に獣の匂いが満ちるのを待つ一日の仕事が始まる。

裁縫箱は白木の蓋だけが積まれ、夫は片手でぐるりくりり回しながら彩色していく。美しい羽を持つ小鳥や花々が白木地を華やかに変身させていくのを見るのは楽しい。傍らで火鉢に手をかざし夫の手の動きに見とれていた小夜がつぶやく。

「お隣は静かね」

「ああ、いつものことだ」

「だって小さいお子もいるというのに、泣きも笑いもせん月はずいぶん根を詰めたから日当も余分にいただけだろう、すりやお姑さんに下着の一枚も土産にできる。小夜は火鉢に炭をつぎ足し、餅網をのせると茶の支度で台所へ立った。

正月を控えて夫婦は山小屋へ向かった。小夜の思惑通り日当の割り増しがあり、正月支度の酒肴の土産もできた。夫には内緒で自分と姑の下着を買った。久しぶりの買い物はわくわくするほど嬉しくて、正月を山小屋で過ごすのさへなになら心が弾む。いつかの夢に見た親子の語らいの中に自分も入り、共に笑う姿が浮かぶ。土産で膨らんだリュックはさすがに息を切らせたが、夫と並んで歩く足取りは軽い。日が落ちるまでには着くはずだったのに、年の瀬は太陽までが気が急くと見え、頂に間のある辺りから暗くなり始め幕を下ろす素早さでとつぷりと暮れた。開拓村の灯が見えるのはまだ先のようなのだ。

「勝手知った道じゃけ案ずることはない」

口数の少なくなった小夜の心細さを察してか夫が言う。「あんたと一緒だもの、平気よ。でもあんたは、いつも仕事を終えてから行きよられたんやから、こんな暗い山道を一人で恐ろしゅうはなかつたん？」

「なあに、わしはもつともつと恐ろしい目に遭うとるけ、こんな山道ぐらいなんのこともありやせん」

小夜は黙ってうなずきながら、政男さんだつてあの夜の私の生き霊に遭うたら、と思う。それっきり二人は黙りこみそれぞれの想いに囚われた。

「あ、村の灯が見えた、ね、あれ」

行く手にぼうつと滲む灯りを見て小夜が声を上げた。

「何も見えんが、もうちよつと登らにや村の灯は見えん」

「でも見えたんよ、灯りが」

「しつかりせいや、この辺りにや狐や狸もおるそうなど」

夫は笑い飛ばすと、小夜の手を握った。冷え込んできた夜気の中で夫の手は汗ばむほど温い。いつの間にか灯は消えている。やっぱり気のせいだった、それとも、狐か狸に……と笑いがつき上がったとき、目の前を行く人の姿がぼんやりと映った。

あれは、私だ。

小夜は夫の手を強く握り返した。師走の星明りが山道を急ぐ足元を辛うじて示しているが、漆黒の山全体が例えようもない大ききで二人を呑み込もうとした。

あれは、私だ。私の生き霊だ。

「どうした、小夜、熱でもあるんか、ひどう震えとるど」

夫が驚いて言う。怖い、怖い。小夜はその腕にしがみつく、ほとんど目をつぶり夢中で歩き続けた。

「山の夜道は怖かつろう」

いる。自慢の前脚やヒゲ、甲羅を取り巻くひれ足と尾を切り取られながら、生前の寧猛さは一向に衰えを見せずにいる。小夜が恐る恐る覗き込んでみると、

「ええ土産をくれたなあ、こげん大きなザリガニを見るのは初めてじゃ」

姑がつまみあげると、夫は満足げに山盛りの馳走を見やった。ここへくる途中の小川で獲ったのだ。

「冷とうにあつたで。わしの膝まで水があつたけの」

小夜は思い出して笑った。子供にまじり大の男がズボンで捲り上げ川に漬かってザリガニを獲るのに呆れて「そんなもん、どうするの」と聞くと「お袋へ土産じゃ」と本気の顔で応じたので二度呆れたのだ。

「政男はなあ、あつちの島で醋え目に遭うとるけの、ザリガニはご馳走なんじゃ」

姑は器用に殻をむき息子に差し出すのを大口開けてくわえると目を細める。小夜はいくら勧められても首を振り、大根の煮物ばかり突付いた。

「この大根の鹽^{ひし}煮、ほんまにおいしいわ。私にはなんぼきばつてもできん、おかあさんは料理上手やわ」

飲めない酒を無理に飲まされ、今夜は小夜の口も軽くなっている。

「料理いうもんやないけど、この大根の煮付けは客の受けもえかった。まあ何もないときじゃつたけ、食うもんい

夕餉の膳を囲むと姑は小夜をねぎらった。姑は週に一度は山を降りバスに乗り継いで町の風呂屋へ行くと言う。

「夏場は日が長いでええが、日が短こうなると帰りは真つ暗じゃけ、一人二人誘うて行くことにしとる」

開拓村には井戸が一つしかない。戸毎に風呂を立てるなどできないのだ。夏場は行水でしのげるが寒い季節は町の銭湯が恋しかった。

「せえでも、時にはたつた一人で行くこともあるで、そんなときは、大声で唄うて歩くんじゃ」

「そりゃええわ、おかやんは歌が得意じゃけ、狐や狸も聞きほれるじゃろ、あはは」

酒の酔いが回ってきたか、夫は上機嫌で相槌をうつ。早くに亭主に死なれ一人息子を戦地へ送り出したあと、姑は小さな居酒屋で暮らしを立てていたというから酒も強い。六十に間のある歳と聞いているが女の一人身を生きた苦労が七十路の老婆にも見える。だがそれとて見かけだけのこと、苦労が背骨を立て足腰しゃつきりと地べたを踏まえさせて、山小屋の一人暮らしを支えている。「頭の上にB29が飛ばんのがなんぼ嬉しいか」

町を焼き払ったアメリカの飛行機B29の狼藉を姑は心底憎んでいるのだ。

膳の上で見得を切っているのは大ざるに盛ったザリガニだ。二十センチはあるう体がみごとな朱に茹で上げられて

うたらせいせい大根か芋ぐらいのものじゃつたしなあ、ほ、今も変わらんけんど、あはは」

奥深い山家には除夜の鐘は聞こえず、正月をついそこに迎えて闇はいっそう濃く重くのしかかってくる。鐘の代わりじゃと姑が唄い始めると、北風に凍み始めた羽目板までがミシミシと聞き惚れ、夫も合わせて歌う。小夜は手を打ち鳴らしながらも、そつと窓の外をうかがわずにいられない。凍みたガラスにびたりと張り付いたあの夜の自分。だがガラスに張り付いているのは幾重にも重なる闇。

羽目板から忍び込む隙間風をさけて頭からすっぽり夜具をかぶり眠っていた小夜が、うなり声にもつれるすすり泣きに目を覚ました。鬼！ とつさに喉から突きあがる声を押し殺した。狭い小屋に充滿する異様な匂いは男と女の交わりとも鬼の息吹きとも知れぬ生臭さを増していく。小夜は自分と政男との交わりが寺の本堂裏の部屋を満たすのを知っていた。暑さで熟れた夏草の匂いは、サカリのついた獣の匂いであり、遠い過去から未来へ連綿と受け継がれる生殖の祀りでもあった。だが、いまこの部屋を満たし増殖し続ける匂いは、生殖の祀りではない。鬼だ、鬼の交わり……唸りと嗚咽が高くなった。

「蛭^か蛭を食うたる、蛇も食うたな、草の根も泥もなあ……さあ政男よう吐いてしまえ、吐いてしまえ、まんだ食うた

もんがあるうがの、吐いてしまえ、吐いてしまえ、おかやんの腹ん中へみーんな吐いてしまえ」

「ああ、切のうて、切のうて、身が裂けそうじゃ、おかやん助けてくれえっ！」

「おお、おお、みーんな吐いてしまえ、おかやんの腹ん中へのう………蜥蜴を食うて、蛇を食うて、へえから何んを食うたんじゃ、さあ、吐いてしまえ、おかやんの腹ん中へ」

小屋の一方に敷かれた姑の夜具が激しく持ち上がり揺すられ、そのたびに枕を外して仰け反る老婆の乳にむしゃぶりつく黒い頭がのぞく。

「食うた、食うたとも、あれもこれもみーんな食うたどな、ああ、助けてくれ、おかやん」

「おかやんの腹ん中を突き上げろ、おめえが入っていた子袋を裂くんじゃ、すりゃ空の子袋がみーんな吸い取ってくれるわ、わしの息子よ、さあ吐け」

「おお、おお！ わしやあ子を食うた！ 赤子も食うた！ わしや鬼じゃ鬼じゃ、助けてくれえ！」

取り巻く闇の手が小屋を揺すり、鬼が絡み合う夜具を揺すり上げるたびに、鬼の泣き声に婆の呻きが絡まり小屋を無間地獄に引きずりこむ。

重い夜具の隙間から目の玉が裂けるほどにも見開き熱い息を吐き続ける中で、小夜は激しく瞬きした。たった今まで枕を外し胸をあらわに仰け反っていた婆の代わりに、夜

先の骨よりいくらか大きな欠片がころんころんと混じる。それらすべてを呑み込みながら、小夜のうずみはいよいよ熱く出口を求めて溢れる刹那を待つ。

「おうおう政男よ、わしの可愛い息子よ、よう吐いたのう、そうじゃ、しっかり吐き出してしまえ、わしの子袋がぜーんぶ吸い取ってやるけん」

「政男さーん、小夜じゃ」

「いんや、ほんまの小夜は私や」

誰が誰とも分らず振れ重なり合う声に窓を叩く北風の音が一つになる。今度こそ、小夜は自分の中にしっかりと政男を迎え入れ、ついで老母をも迎え入れた時、遠く今ひとつの声を聞いた。

「なまんだーなまんだー」

窓を打つ風にまじる念仏の声は報恩講に参集した善男善女の読経らしい。老いた院主の読経にまじる若い役僧の瑞々しい唱和がなんと快いこと。

「吐いてしもうた、みーんな吐いてしもうた」

つい耳元で、念仏に合わせる政男のささやきを聞く。いつの間にか二人は隙間もなく抱き合っていた。

「うずみじゃ、うずみじゃ」

小夜をかき抱きながら政男が呻くたびに、小夜の体の深奥からこんこんと熱い泉が湧き出し男に注ぎ続ける。一番鶏が鳴き、山羊の甘えた声に続いて犬の間延びした

目にも光るほどの白い肌に盛り上がる乳房の女を見た。揺らぐ夜具から鬼の手がのびて両の乳房をつかむと「おお、小夜か」と悲鳴に似た声を上げた。

「ああ小夜だよ、小夜だよ！」

「おお、おお、小夜じゃ、こん乳は小夜の乳じゃ、有難いう、餅じゃ、正月の鏡餅じゃ、柔らこうて、旨うて」

鬼の手が女の豊かに光る乳を揉みしだき赤い乳首をくわえるたびに、それを見ている小夜の体に熱い震えがはしる。あの女は私やない、生き霊や！ わたしはここにおる、ここにおる！ 小夜は手にあまるわが乳を抱えて叫ぶが、声は喉奥で空回りしてひいひいと笛吹くだけ。手足を伸ばそうとありつた力の力をこめるがびくりとも動かぬ金縛りの中で、瞬きを忘れた目の玉だけが鬼の狂態を見ている。やがて、小夜の体に埋め込まれているあらゆるものが五体の末端からうごめき始め、夥しく張り巡らされた血管の管から女の要へと流れていく。それは誰の目にも見えず小夜にしかわからぬ熱くとろける快感をとめないひたすら出口を目指す。何食わぬ顔で白飯の下にひそみ、箸の先でつき崩される時を待つて現れる顔、美味、五色の彩り。

「……赤子を食うた」

政男の重い呻きとともに、小夜のうずみに小さな貝殻ほどの骨がころんと混じる。

「……子供も食うた」

吠え声を聞いた。竈で湯を沸かすらしい姑のひそやかな気が夢の続きのように聞こえてくる。刺すように冷たい山気が小夜の頬を撫で、更に小屋の隅々まで洗い流すと新しい年を迎えた。

「楽しみにしとったのやけど」

レトルトの「うずみ」を買ってから忽ち日が経ち、正月を控えて再び和菓子屋へ立ち寄ると女は言った。

「どうでしたか」

「悪いけど、がっかり。でも仕方がないよね、今の人はほんとの『うずみ』を知らんのなもの」

「そうですね、私だってぜーんぜん知らんかったもん。でも、けっこう皆さん買って下さるんですよ」

若い嫁さんは嬉しそうに言う。

「まあ町おこしなんやからね」

女は曖昧に受けながら正月用にと菓子を運び始める。決まって元日に訪ねてくる友が喜びそうな栗羊羹にしたが、豆大福も悪くない。この年齢では黒豆を難なくいただけるのもあとわずかだものと思ひ迷い一人おかしがった。

通りに面した棚に以前にもましてレトルトの「うずみ」が嵩高くひと目を引いている。レットルの中央に黒塗りの椀が置かれて、椀を取り巻く格好で埋められる具が画かれている。

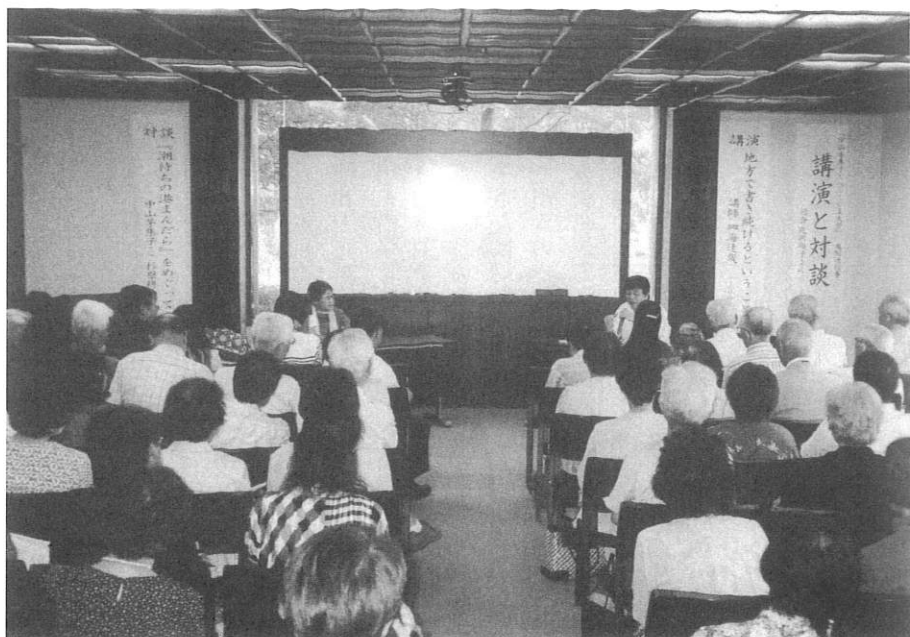
ふくやま文学

広島県

ふくやま文学の近況

戦後、福山には「文芸プラザ」という同人誌が誕生し、月刊で百号以上続いたが、主催者の病没で惜しくも休刊になった。その後、あとに続く同人誌が現れず、「文芸プラザ」を作品発表の場としていた同人たちの声にこたえて、新たな舞台として立ち上げたのが「ふくやま文学」であった。小説、児童文学、詩の三部門を柱に平成元年に創刊、年一回のペースで刊行し、今年二十六号を上梓した。この間、会員の高齢化は避けがたく、作品のマンネリ化を案じていたが、二十三号あたりから若い同人が増え、ジャズバーやビストロのオーナー、獣医やオペラ歌手志望の若い女性などの参加で俄然活気が出てきた。

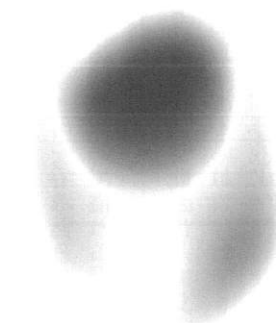
新しい同人の参加理由に、「福山文学館」でのイベントが大きかったと思う。どこの文学館でもそうであるように、この町の文学館も福山を出身地として大成した文学者を顕彰している。だが、彼らの殆どは物故作家である。なぜ、今を生きて精進している同人誌に光を当てないのか。「他者の痛みを共にし、人としての幸せと自由を求めて書く」のであれば名を成した文豪も、修行の途にある自分たちも



福山文学館「ふくやま文学」展での講演と対談

「あら、松茸がない」
 女のつぶやきに「松茸？」レジの前の嫁さんが驚いたような声を上げた。
 「だって、うずみには松茸が入らんと」
 「へええ、そうなんですかあ」
 無邪気に感心している。
 「でも仕方がないよね、いまだき松茸なんて」
 「そうですよ」
 嫁さんが力をこめて言う。
 「やっぱり豆大福にするわ」
 女はレジへ向かいながら、今では遥か遠い景色のなかに佇む小夜にそっと手を振った。

(「ふくやま文学」24号より転載)



中山茅集子

なかやま ちずこ

- 1926 北海道札幌市生まれ
- 44 広島県立府中高女卒
- 76 「蛇の卵」にて中央公論第19回 女流新人賞受賞
- 77より97年まで「井上光晴文学伝習所」に学ぶ
- 88 同人誌「ふくやま文学」創刊
- 97より同人誌「クレーン」に小説を投稿
- 2008 「魚の時間」でまほろば賞優秀賞受賞
- 10 「もう一つのドア」でまほろば賞優秀賞受賞
- 14 「うずみ」でまほろば賞優秀賞受賞



第24号

変わるところはないはず。

だが当初、文学館の対応は「同人誌のイベントに誰が足を運んでくるのか」と冷たいものだった。それでも諦めきれずに三年もの粘り勝ちで、平成二十一年、遂に同人の夢が叶えられた。同人の手によるポスター作りから始まり、真夏ひと月半の長丁場を埋めるのに、「見る、読む、聴く」を柱としたパフォーマンスを企画した。人を呼ぶための策として、ともかく楽しいものにしたのが念願だった。

詩、小説、エッセイが言葉の芸術であれば音楽や絵画もまた仲間内だろう。そこで、言葉と絵画のコラボレーション、朗読と音楽のコラボレーションを取り組めばお客が集まり、無名作家の作品にふれてもらえるだけでなく、作家自身も自作品の絵画性、音楽性について見直す機会が得られるかも知れない。

『言葉と絵画展』では町のギャラリーの協力をもらった。同人誌作家と画家の作品の取り合わせは、もともとその文章のための絵でもなければ、絵のための文章でもないのに不思議と融合し面白い。さらに効果をあげたのは、文学館の学芸員の製作に成る見事な展示パネルが魅力的なコーナーを出現させたことだ。

『朗読とコンサート』では、文学館に所属する朗読の会「虹」の協力と、音楽関係では「ネムカカとさいとういずみさん」という若手ミュージシャン、山本シンさんというベテランのブルースシンガーに加えて、世界的に活躍しな

がらも横浜から手弁当で駆けつけたシャンソン歌手松永祐子さんの友情出演があった。

朗読は同人の自作朗読と「虹の会」のメンバーで行ったが、自作朗読に自信のない私たちを励ましてくださった「虹」の代表の言葉は忘れられない。

「作者は練習しなくても、作品に書かれた思いを表現することができず、私たちは練習を重ねないと作品の心に近づくことができません」

いよいよふたを開けたときは、自作の朗読もそれなりに作者の持ち味を出して好評だった。すべての朗読に「ネムカカとさいとういずみさん」がピアノで、山本シンさんがギターが爪弾きでメロディーを流し、いずれもアドリブだったらしいが素晴らしいアイコンタクトだった。足のご不自由な松永祐子さんは舞台ではなく、作品展示室を希望され「アカペラで唄うのは初めてよ」と笑いながら熱唱されたのも異色の友情出演だったろう。

会期中、文学館の危惧を見事に撥ねかえして千人を超える来館者があった。中でも九州佐賀の同人誌「佐賀文学」から大勢の仲間が駆けつけてくださったのも有難く嬉しかった。今も心に刻まれているのは、来館者の殆どから「文学館になんて初めてきました」の言葉を頂いたことである。あの日からさらに五年が経つ。今年四月、二十六号の合評会を行った。例年のように高崎の「クレイン」や「ふく文」の読者など二十人余りの参加者があり、活発な感想や批

評が交わされた。以前この場で紹介した毎月の勉強会も続けている。その中で若い書き手が育っているのも頼もしい。創立会員である私などは、今どきの若い書き手の文章に戸惑うことが多いが、話し言葉同様に文章も時代と共に変わっていくのだろうかと思ってしまう。勉強会のいいところは、このように年齢差による時代の変化を敏感に捉えることかもしれない。一瞬変化に立ち止まっても、突き破る情熱を失いたくないと願う。(ふくやま文学同人/大河内喜美子)

郷土と歩む同人文学

福山市東深津町の作家
あずから 草稿や写真を展示

福山市東深津町の作家
中山茅集子(88)
福山唯一の文学同人誌
「ふくやま文学」の活動
を紹介する企画展が11
日、ふくやま文学館(福
山市丸之内)で始まる。
中山さんは故井上光晴
さんの文学伝習所で15年
にわたり指導を受け、自
身の創作活動のほか後進
の指導、読書会開催など
意欲的に活動を続けている。
2006年から中国
新聞で小説「潮待ちの港
まんだら」を連載。今年
6月、続編を發行した。
代表を務める「ふくや
ま文学」は1989年3
月創刊。年1冊刊行し、
今年3月に21号を迎え



企画展の準備のためふくやま文学館
に集まった中山さん(左から3人目)
と「ふくやま文学」の同人たち

た。小説、詩、児童文学、
エッセイから成り、毎月
の学習会に作品を持ち寄
る。
会員は約40人。発足時
から事務局を務める藤王
町の大河内喜美子さん
(82)は書きたい(伝えたい
という)気持ちで活動の
支えだった。言葉や思い
の数々は、自分自身の歩
みと重なるを振り返る。
「中山茅集子」と「ふく
やま文学」展には草稿、
ふくやま文学のバックナ
ンバー、同人作品の抜粋、
「まんだら」の舞台とな
った福町の写真パネルな
どを展示する。

中山さんは「文学とは
人間が生きていくために自由
と幸せを求めること、決
して文豪だけのものでは
ない。書くことの楽しさ
、地方で書き続ける同人の
存在を知ってほしい」と
呼び掛ける。8月16日ま
で。(伊藤敦子)

ふくやま文学 〒721・0974

福山市東深津町 6・3・58 中山方
☎連絡先 084・922・5864 (中山茅集子)



ふくやま文学合評会

蟹

尾本善治

部屋の中には潮の香りが立ちこめ、甲羅に人の顔を浮き彫りにした蟹たちが、胴体の倍はある長い脚を絡ませ、螯でつかみかかったり、ざわざわとひしめいて、仲間の背を這っている。濡れた甲殻は艶をおびてかすかに光り、甲羅にあらわれている顔の、暗いまなざしを凝らす気配に、いまにもその口もとからくぐもった声を発してきそうな気になさせられながら、楠原は蟹の一匹ずつを指先でつまんではポリバケツへ放りつづける。砂礫の擦れ合うような音が、しきりに立った。交接中のものや、卵を抱えた姿もあった。

容器が三分の一ほどに達するたびに、ガラス戸から海へ向かった。外に出ると波の音が部屋にいたときよりもよく聞こえ、気分もだんだんおさまっていった。狭い物干し場の、申しわけ程度にブロックを積みあげただけの囲いを砂利敷の駐車場へと抜ける。あたりはまだ水に濡れ、潮の香りの内から、雨のにおいがほのかにふくらんだ。サンダルの底から礫の硬い感触がくすぐたく伝わってくる。地面にできた水溜りの中で表情のないくつもの顔が微弱な光を白く集めて這いまわり、敷地を抜けた先には、黒光りする物静かなアスファルトの上で、無数の押し潰された蟹が散らばっている。砕けた甲殻のかけらに蟻が群がっている。湿りけをおびた潮風が、まだ静まったままにいる民家のあいだを熟れた腐臭とないませになって渡り、その味に喉が渴いた。ときどき把手が指の肉を挟んで痛く、いったん地面におろして持ち直した。持ちあげるときに左右のバケツへ目をやってまだ生きていたのをたしかめ、歩を進める。四年前の五月にこの芦屋浜に来て、初めのうちはおとなしく周囲に合わせていたものの、いつからか、ほかの住人たちとおなじようにして、侵入してくる蟹をすべて殺してしまうことに、嫌気が差していた。バケツから立ちのぼる音を耳にして左右の肩を交互にあげ、堤防の階段をゆくりと降りていく。

部屋へ入りこんでいた蟹をすべて浜に放してしまっただけ

外から届いてくる海の音に耳を澄まし、屈んでいた腰をかるく伸ばした。不器量なかたちをした上唇の、すつかり乾ききったのを舌で湿らせ、まぶたを閉じる。網戸のみ閉めておいた奥のガラス戸から風が流れ、この古い五軒長屋の住人をはじめとする近隣の人たちが殺めてきた蟹の死骸から放たれる臭気が潮の香りと融け合い、喉に粘りつきながら胸へと重く沈む。蟹の立てつづけている音が不意に耳の底で高まっては離れ、あとにつづく静寂に、自身の息遣いが際立つ。息遣いの向こうから、高く細い耳鳴りが始まる。みぞおちに凝った吐きけが伸びあがるのを喉を絞ってこらえ、蟹を生け捕る作業をつづける。

ら、空を仰いで深呼吸をした。パジャマの胸ポケットから煙草の箱を取り出し、一本を銜えて火を点ける。先端の煙火を光らせて、潮の香りとともに煙を吸いこむと、鎮まるとばかり思っていた嘔吐感がふたたびみぞおちに呼び醒まされ、眉をしかめて何度も咳きこんだ。タールの残滓が呼吸に引っかけかりを与える。もう一口吸ってみるが、やはり不味かった。唾を吐き捨て、煙草を死骸の丘へ弾きとばすと湿った砂の上へ転がり落ち、しばらく細い煙をなびかせて、自然と火が消えてしまう。

二本目を口にする気にはならなかった。足もとに這う蟹をかわしつつ波の届く手前あたりまで水際へ近づき、それに沿ってゆつくりと歩き始めた。表面を白く泡立たせて波が浜へとすべりこみ、打ちあげられている魚に手を伸ばしては引き寄せ、あるいは押し出し、わずかな水を引き摺って、泡沫とともに置き去りにしていく。ときおり空から飛来してくる鳥にさらわれてしまうものは別にして、寄せてきた波に乗って沖へ泳ぎ帰っていく魚もあれば、波がなかなか届いてきてくれず、または乗り損ねてしまい、それでも懸命に跳ねつづけているうちに動きが弱まり、砂の上へ沈みこむ姿もあった。八日つづいた雨により水嵩を増した川の流れに吞まれてきたのか、打ちあげられた中に、いつもは見かけない魚が多く見られた。歩みをとめて沖の向こうへ視線をあげていくと、空との境に大きくひろがる蒼の

うねりが、ところどころで光を白く受けとめ、その彼方に大阪の山々が青黒く横たわっている。そのさまをじつと眺めていると、自然と頬がほころぶ。四年前、二十五になったころに、一人暮らしを始めようと考え、二ヶ月のうちにいまの住みかを決めたのだった。梅雨どきから秋の初めにかけての時期にこのあたりで雨がつづくと蟹が大量に発生するという話はだいぶ以前から耳にしていたし、実際にその様子を見物しに来たことも、過去に何度かあった。だからやめておこう、とは思わなかった。家賃などの費用が安く済んで、海が近ければ、あとはなんでもよかった。

呼吸をおこなうたびに口腔が潮の香りに満たされ、目を瞑ると波の音が全身を浸してくる。体中の細胞にやわらかな疼きが心地よくひろがり、ときおり割りこんでくる蠅の唸りが耳障りでならない。それでもなお楠原は耳を澄まし、海の音へ意識を集めていく。寄せては返す音の反復に、呼吸がしだいに寄り添う。潮風が皮膚をゆるやかに撫でる。うねりの表面に光を受ける水の姿がまぶたの裏にあらわれ、内へと向かう聴覚から、蠅の翅音がすこしずつすこしずつ、消失していく……。

敷地内の水溜りや蟹をよけながら部屋へ帰っていると、隣室の早石がガラス戸から出てくるのが見えた。今年の春から大学二回生になっているのは彼の、両手にバケツを提げて顔は地面に向けたまま水溜りをかわして歩き、蟹を部屋の中へ入り、テーブルの上にあるノートパソコンを立ちあげた。玄関にも布団のまわりにも蟹の姿はなくなり、生臭いにおいが小窓から流れこんでくる腐臭と混じり合って、湿った空気の中で淀んでいる。ほっと息をついて扇風機をつけようと尻を浮かせたとき、テーブルの下で求人情報フリーペーパーの陰から覗いている履歴書が目にとまると、しばらく見つめては、雑誌ごと視界から退けた。

前の仕事を辞めてしまつてから、もう一年以上が過ぎていく。まだすこしは貯金が残ってはいるけれど、それでいつまでも食いつないでいけるはずもない。実家からたまにかかってくる電話には大丈夫だと言いつづけてはいるものの、実際のところは、そんなふうには言っていられる余裕など、ありはしない。

部屋の中で面接官と向き合ったとたん頭に血がのぼり、脳にわずかな痺れをとまなつて、白い火照りが全身にひろがっていく。不安をどうにか抑えて、舌や唇の動きをいちいち確認しつつ声を発していかなければ、夕行が力行になつたりして、うまく喋ることができないのだった。だからといって一言一言をゆつくり声に出すようにしていると、今度は相手にまどろっこしく思われてはいかないかと気懸りになってきて、もっと早く、快活に話していかなければならぬ、などといった義務感に囚われ、身の内から湧き

踏みつけることには頓着しない様子だった。ふと、日に焼けた顔があがり、楠原に気づいたらしく、頭がわずかにうしろへ揺らいだ。歩調をさらにゆるめた楠原とほど近い距離にまで差しかかったところで早石は表情をびくりとも動かすことなく、会釈と捉えていいものか惑うほどの微妙さで上体を前へかたむけてくる。手にしたバケツの縁から、蟹の死骸がいまにも零れ落ちそうだ。楠原が立ちどまつて会釈を返すと相手はちいさくうなずき、そのまま通りすがったときにふと足がとまつて、こちらのバケツを覗きこんでくる。——ちゃんと、殺しましたか。

問いかけられて、楠原は一瞬、呆けたように相手の目を見つめ、それからすぐに浜にある蟹の死骸の丘を思い描いて、うんとうなずき、右手のバケツをちいさく揺らした。去年、最後に蟹が侵入してきたときに殺さずに浜へ放したのを目撃され、その日のうちに管理人から電話があり、そういうことをされては困る、今後またおなじようなことがあつたら、出ていってもらわなければならないと、厳しく咎められた。

それならいいですけど……、ちゃんとしてくださいよ、とそれだけ言うのと早石は楠原とバケツとを交互に見やり、立ち去つた。そのときの早石の目に、薄笑いの影が認められた気がした。楠原はなんと言葉を返すこともなく、その背を見送つた。

起こる圧迫の中で、舌頭の心もとなさに呑まれて声が弱まり、相手に聞き返されたりするたびに焦りが募つて、目の前にいる人物の眉間ばかりが気にかかる。耳にしている相手の声がしだいに遠くからの反響めいてきて、体内の火照りを持ってあましているながらも、頭の片隅にはかえって平静さが澄み渡っていく部分もあつて、そこには、しどろもどろになつている自分の姿を、遠くから仔細に眺めている自分がある。

そうしたときの自分の姿が、はたして彼らの目にどのよう映っているのか。これまで自分のやりたいことなどなに一つ見出せず、なんの資格も経験も持たないままやってきた、来年の三月には三十にもなる男が、自信のない肉体労働や営業職、誰にでもできるとか聞いていて、それならばと高を括つてやってみたものの、どうも反応と動作が鈍すぎて駄目だったライン作業などは抜きにして、何度も履歴書をこしらえては手当たりしだいに持つて行き、無様な姿を晒してまわる。この長い不況の折りに、まったくの未経験者にも機会を与えてやろうという寛大な意思を示してくれた雇用主側からすれば、とても迷惑な話だろう……。ここまで思考を進めていくと、しだいに自分の、奇形の唇を持った醜い顔が彼らに嫌な印象を与える手助けとなつていのではないかと気がなつてくる。さきほどの早石にしても、彼が隣に引越してきたばかりのころに

は、気さくに話しかけてくれていたものだった。こちらもここからすこし行ったところにある商店街のいろいろな店の情報や、初めて臨む一人暮らしに向けての助言など、尋ねられればできる限り教えてあげるようにしてきていた。けれどもこちらは小学生のころから、他人と接することをなるべく避けようとする癖を身につけてしまっているのかよくわからなくて、始終おどおどし通しだった。にこやかな表情で気がねなく頼ってきてくれる隣人を前にして薄ら笑いを浮かべ、相槌の入れようを間違えていないかと目の色を窺いつつ話を聞いて、ときおりはこちらからもなにか話を振ろうと考えてはみるものの、なにを話せばいいのかまったく見当がつかない。たとえなにか話題を思いついたとしても、今度は相手がはたしてそれに興味があるだろうか、聞いていて退屈ではないだろうか、無闇に年配者ぶっているように映らないだろうか、機嫌を損なわせたり戸惑わせた、啜くわわれたりはいらないだろうか、などといった不安ばかりが先に立ってわだかまり、喉に詰まる。やがて相手の話が跡切れがちになって、差し挟まれる沈黙の嵩もふくらみ、ますますなにを話すべきかおぼつかなくなっていく。そうしているうちにだんだんと向こうのほうから遠ざかっていき、おそらくはこのゆがんだ唇や「こんにちは」が「こんにちきは」になってしまっていたりするわけのわからない言

はもう、突き出た下唇を整形外科医の手によって引っこめることで横顔の輪郭を整わせる以上には完全なる普通のそれへと近づくことのできない、この唇だった。

まだ小学一、二年だったころ、まわりの友人たちが楠原をからかう際にそれぞれ自分たちの上唇を上へと押しあげてみせるようになりだした。楠原はその振る舞いをただ訝しがって、なんやねん、おれだってそれぐらいできるわ、と自身の上唇を押しあげ抵抗していた。しかし、まわりの子らはよけいに笑いを昂じさせ立ち去っていくばかりで、当人は首をかしげてその背を見送るのが常だった。

小三になってもその振る舞いはつづけられ、楠原はある日、河川敷でのドッジボールを抜けて家へ帰り、鏡台に向かった。化粧品のおいが鼻腔をくすぐり、母親が台所で水仕事をしている音が、蝉の声に抗うように響いていた。観音開きの戸を開き、三面鏡の真ん中をじっと見つめる。ふだんと変わらない顔がそこにあった。椅子に腰かけて息をつき、彼らがおなじようにしているさまを思い出しながら、人差し指でゆつくりと上唇を押しあげる。あげてみて違和感を覚え、指をいったん離してもういちど押しあげる。やはりどこか違っていた。腕を組んで考えてみて、彼らが上唇を押しあげていたのではなくて縁の真ん中からまくりあげていたことに気づいた。なんだ、と自分自身の思い違いをちいさく笑い、指さきをあらためて上唇へ持つていく。

葉、妙におどおどしてばかりいる情けない態度、などといったすべてのことがらに對してすっかり軽蔑や嫌悪ばかり抱くようになってしまったのだろう、もし自分が早石であれば、やはりおなじように感じてしまうことだろうと、諦めに近い感情を抱くようになっていった。

意識しないままに人差し指が上唇に触れ、そのまま横へ這っていく。指さきのゆつくりとした動きを唇は鋭敏に感じ取り、楠原はおのずから触れられている部分へ神経を集めていく。指の腹が過ぎたあとにも触触は粘り強く尾を曳き摺る。人差し指の拾いあげる触感に誘われて、あきらかに他人とは違う唇のかたちをあらためて自覚させられ、同時に、粘りついた感情の塊が背すじに悪寒めいたふるえを引き起こしつつ胸の内へ沈み、全身の皮膚の下をざわざわと疼きが巡った。裂けた上唇が鼻のあたりまでめくれあがり、押し潰され、ちょうど獣の口に似たかたちをした下辺の隙間から前歯を覗かせている自身の顔が、脳裏に浮かびあがってくる。

この唇がすべてだった。級友たちのみならず先輩や後輩たちまでが楠原を、お化け、妖怪、変な顔、鱈子唇、蛸男といった言葉で呼びつけ、ときには障害者だと見なしてくるきつかけとなったのはすべて、これまで記憶にある限りで口腔外科で二度の手術をおこないはしたものの、上唇のいびつなかたちは多少ましになった程度のまま残り、あとそしていざまくりあげようと指の腹を下辺の縁へずらし、ゆつくりと動かす。

しかし、目の前に映し出される顔は、いましがた間違えて上唇をそのまま上へ押しあげていたときと変わらなかつた。眉をひそめて手をおろし鏡へ目を凝らしていると、彼らが上唇をまくりあげていたときのかたちが、いまなものに似ているときの自分の唇と似ているのに気づいた。もういちどまくりみて、歯茎が唇の始まるどころまで露出されるばかりで、まくれているのも彼らと違ってほんのわずかだけだった。さらにまくってやろうと力をこめてみても、痛いだけでなにも変わらない。

なかば開いていた口を閉じ、そのとき、下辺の真ん中が釣り針かなにかで上へ引きあげられているかのよう鼻へ向かってへこんでいるのを見出して、彼らの上唇はまったくこんなふうではないことに思いあたった。むしろ真ん中でほんのわずか下へ突き出ていることが多く、すくなくとも下辺の真ん中でへこんでいるなどというのは、これまでよそで見た憶えがない。唾を呑み、おそろおそろ指さきを下辺の縁へあてて、左から右へと動かす。指は鏡に映されているとおりの縁をそのままなぞり、唇に伝わる触感に体がふるえた。

腰を浮かせて顔を鏡へ近づけ、口もとに目を凝らした。ぺしゃんこの鼻の両穴から薄桃色の筋が一本ずつ、台形に

近いかたちをした上唇の上辺へと伸びている。指の腹で上唇の表面を撫でてみると中央でごく浅い谷をなしてい、三面鏡の右手に映る横顔へ目をやると鼻の下から肌がほんのすこしだけあり、そこから唇の淡紅色が垂直に輪郭の線をおろして、下唇が強く前へ引っぱられているみたいに剥き出しになっている。

頭が揺れ、息が詰まってきた。静けさが熱とともに身の内へひろがり、蟬の音が遠ざかっていく。鏡に映る自分の姿の背後に筆筒や長持が翳りをおびてあり、ふだんならばその木目の内から見知らぬ人間の姿でも浮かびあがってきそうな静寂に包まれて、寂しいようなこわいような気にさせられながらもつい心惹かれて見入ってしまったものだった。いまは目の前にある自分の姿ばかりに意識を奪われ、なにを感じることもなかった。荒くなった呼吸が耳につき、友人の振る舞いが何度でも頭の中でくりかえされる。なにか別のことを考えようとしてもしつこく頭から消えずにいるその光景を拳に力をこめ歯噛みして見入っているうち、なにやってんの、と声がかかって、振り向くと母親が、こころもち険しさを奥に宿らせた目をこちらに向け、立っていた。

耳の奥に蘇った母の声に体がびくりと反応し、とっさに右手を背に隠した。いるはずはないと知りながらもあたりを見まわし、いないことをたしかめると、息をついて壁の機能の低下にまで作用してくれることはなかった。それ以降はもう手術はなくて、あとは大阪大学歯学部病院での発音の訓練のみ残されていたのだが、こちらは高校二年の初冬に、十年以上も世話になってきた担当者から、もうこれ以上は無理だと見切りをつけられた。舌の筋肉にこれ以上矯正しようのないほどの、力の加わりかたの微妙なずれがあり、さらに自身の低い声質そのものが聞き取りにくさに輪をかけてしまっているとのこと、しかしさほどには日常生活に差し支えることはないだろうし、もうなにも気にせず受験勉強をがんばってくれと励まされた。

緑色ブレザーの制服を身につけて、休み時間中の騒がしい教室の中で机に伏せて寝た振りをつづける過去の自分が、脳裏に浮かびあがる。なにも変わっていない、ときおりわずかに動くうしろ姿を見つめ、楠原は最後に勤めていた看板の製作と取りつけをおこなう小さな会社でのことを思い出していた。店の庇にテント代わりを使用する、アルミの外枠に合成樹脂の板を嵌めこんだ看板を扱っていて、肉体労働ではあったものの、すこしでも自分に自信を持ちたいと、あえて選んでみた仕事で、その前に勤めていたガラス瓶検品作業所よりはるかにいい給料も、魅力だった。その社長と初めに顔を合わせたときから、その唇はいったいどないしてん、などと尋ねられていた。ただそれだけのことならなんの問題もなく、きちんと、正確な原因はまだ

頭をもたせかけた。口の中で舌を上顎へやり、直径一センチほどの肉塊に触れる。ざらついていてわずかに硬い、弾力のあるそれは、上顎が裂けた状態で産まれてしまったがために開いてしまった、口蓋から鼻腔へと通じる穴を塞ぐ腰骨のかけらを覆うようにして固定する、自身の舌から挟り取った肉のひとかけらだ。いつかただ一人とだけ経験した、他人の舌との交わりを想起して、楠原はゆっくりと舌を舐めつつける。

口蓋に穿たれたちいさな隧道は、吸った涙のほとんどを、ときには鼻くそと一緒に舌の上へ落してくるほかに、息を抜かせ、言葉の発音をいまよりも不明瞭なものにさせていた。まわりの人らはこのような隧道など持ちあわせていないと知ったのは、小学五年のころだった。小六のときに上唇と鼻のあいだにあった二本の筋を目立たなくして上唇に丸みをおびさせ、隧道の入口もこのころ義歯の歯茎部分とおなじ材質のプレートで奥歯に固定して塞ぐようになったのだが、中学二年の秋に骨と肉によってこれを閉じた。この二つの手術のうち後者は、命を落とす可能性がより考えられるものであることだし、やってもいいけど、別にやらなくても差し支えないが、どうだろう、と担当医から事前に問われていたもので、それでもいいと答えた楠原の胸には、死への期待もすくなくあつた。結局は無事に終わったわけだけれど、奇形にもなった舌

あきらかにされていないのですが、産まれるときに、上顎を形づくる一對の骨がうまくくつつかずになっていたからなんです、といった旨のことを答えるようにしていたのだが、相手はいくら本当のことを言っても、理由がはっきりせず、そんなあほなことはないやろ、とけつして納得しようせず、それどころか、派手に殴られたからだとか電柱にでもぶつかったんだらうとかいった話を創りあげてはにやけた巨大な顔を載せた小柄な体軀を揺すって聞かせ、さらにはそれを認めさせようとしてきたのだった。

およそ二年のあいだ、それはつづいた。社長はかつて学校にいた同年代たちと変わらず、独りよがりの幼稚な遊び心や親しみに満ちた言動をくりかえしているときの顔は実にうれしそうに、楽しげに見えたし、やめてください、とときどきは訴えていた楠原に対して放った言葉にしても、彼らとの違いはなかった。冗談やろが、そんなに気にするんやったら、金貯めて、美容整形手術でもなんでもせえや。十一月なかば、資材倉庫でアルミ材の切断作業をおこなっていたときのことだった。その言葉を耳にしたとたん、全身の皮膚の下をなが激しく蠢きまわるのを感じ、細長い角材でコンクリートの床を力まかせに打ち据えては相手の足もとに投げつけ、表へ走り出た。おい、待て、と後ろから社長の声がした。追ってはこなかった。息を切らし駅に向かって走りつづけているうち、アルミとコンク

リートの激しくぶつかり合う音と、片腕で顔を庇い固く目を瞑った社長の姿とが、頭に何度も巡った。途中から喘ぎ喘ぎ早歩きへと移り、ジャンパーと靴を残してきたことに気づいては悔やんで、衣服の袖をたくしあげる。ひどく喉が渴いていたけれど立ちどまってしまふのが不安で、自販機の前を通りかかるたびに足を速めた。ズボンの前ポケットに入れてある携帯電話がふるえつづける。駅までの道のりがふだんよりも遠く感じられ、床を打ち据えたときの衝撃に、右のてのひらが痺れつづけていた。

こんなふうになんて生まれてさえこなければ。自分自身をあらためて見なおしてみたとき、昔からかならずそのような考えへと行き着いてしまふ。どうにかして脇へ逸れていこうとしてみても、ひっそりと背後についてまわる深刻な感情に誘われて、以前とおなじ向きに寄りかかる。それでも、それではいけないと自身を戒め、なんとかして考えを別のほうへと進めていこうとするのだが、迂回してしまおうとすればするほどに、知らず知らず思考はすでに前にも辿った筋道へと傾いていて、結局はまたおなじところに行き着く。ずっとそればかりをくりかえし、その一方で、高校生のころにたまたま母親の手記を読んできてから、この奇形をいっさい否定してしまうことへのうしろ暗い感情が陰についてまわるようになっていた。

高一の、学年末考査の時期だった。くだした腹を抱えて

ていた。

トイレから出るとノートをもとに戻し、二階の自室でパソコンを立ちあげた。ノートにあった口唇口蓋裂という言葉を検索し、適当なところを見てみると、その症状を抱えて生まれてきた子供の画像がずらりと並んだ。上唇が二つに裂けて、鼻もへしゃげられたかたちになっている赤ん坊の顔がほとんどで、中には、完全に二つに割れている口蓋が大写真になった写真もあった。自然と息がひそまるのを意識しながら画像を眺め、ふと、上唇がちょうど真ん中のところで裂け、鼻も円くなっている子供の顔を見て、まるで犬のようなだなど思い、漫画などで二頭身にデフォルメされた人物が、ちょうどこのような口と鼻をしていることがあることに思いあたった。あれらはみんな、ここに書かれている兎唇みづくちというやつなのだと、楠原は考えた。ときおり尻尾や耳、ごていねいに左右三本ほどずつの長い髭まで追加されてかわいらしく描かれるからあれは許されているのだ。そういえば、狼男というやつ、あれの起源の一つに口蓋裂もありはしないだろうか……。いつだったか国語の女教師がテストの監督中に読んでいたのを見て手に取ってみたサマセット・モームの短篇に、兎唇が、不気味な、嫌悪感を催させる特徴として描かれていたことが連続して想起され、楠原は椅子から立ちあがってたしかこの本だったかと本棚に収まっている新潮文庫の『雨・赤毛』にあたりを

誰もいない自宅へと帰り、用を済ましてからもなお便通の感覚が粘りつづける尻の穴へ気をやりつつ戸棚から薬箱を引っぱり出したときに勢いあまってさまざまなものが一緒に飛び出し、数冊のハーレクイン・ロマンスや推理小説とともに棚の中に残っていたのが、その古びた厚いノートだった。水で丸薬を呑んで、ノートを手に取り開いてみれば、いくつものとりとめのない断想が、きちんと日付まで附して書き連ねられている。三日つづけて綴られているのもあれば、そのあとが一週間後であったり二ヶ月ほどとであったり、気が向いたときにだけ書いていったのだろうと受け取ることでできるそれらの文章の内容から、母親のものであることはすぐに推し量ることができた。

うしろめたさに囚われながらも、ふたたび便座に腰かけて文章のいくつかを飛ばし読みしていくうちに、楠原の口蓋に穿たれていた隧道を塞いだころのことについて書いた箇所があつて、その中に、手術が無事に終わり、穴を塞いだことによつて息子の話す言葉の発音がより明瞭になったことについての安堵と喜びとが、だんだんと筆圧の増してゆく文字で綴られていき、かつて自分たちに初めて授けられた子供が口唇口蓋裂症というかたちで生まれてきたと知ったときには、こうなればもう、この子と一緒に死んでしまおうかと思ひ悩んでいたものだった、という一文で締められ、その一連の文章の上に大きくバツ印が架け渡され

つけて探し、「ホルル」という短篇の中に見出した。(たとえて見たことがなかったほどの醜男)として描かれる中国人コックの描写が、兎唇という、それまで聞いたこともなかった言葉とともに、なぜか印象に残っていた。——(大きな四角い顔は、まるで大きな拳でもグワンとやられたように、平べちゃであり、おまけに深い疱瘡の穴まで、一面にあいている。だが、それらにも増して不快感をあたえたのは、手術もしないままで放つたらかしにされている、ひどい兎唇だった。裂けた上唇は、鋭角状をなして、鼻のところでまくれ上っており、その間から、黄色い、大きな牙が、ニユツとばかりにのぞいている)

隣室から扉を強く閉める音が聞こえ、壁の向こうへ耳を澄ます。(すさまじい、というよりほかなかった)とつづく文章のその部分を、これまでも何度か読み返していた。これを最初に読んだのが母親の手記を目にする前だったか、本当のところは記憶があいまいだった、ロレンス・ダレル『アレクサンドリア四重奏』のナルーズや、畑山博『いつか汽笛を鳴らして』の主人公と出会ったのがそのあとであることは確かだったが。自分もモームが記したふうに見えるのだからかと、国語教師の整った顔を正視できなくなつたのを憶えている。部屋を歩く隣人の足音がこちらへ近づき、わずかに過ぎては消えてしまふ。硝子戸を閉ざす音のしたあと、ふたたび足音が聞こえて高い電子音が短

く鳴り、物干し場のほうから室外機のまわる音が低く立ちのぼる。楠原はガラス戸の上に顔を向けて、前の住人が残っていた、旧型の壊れた茶色いクーラーを恨めしく眺め、なまぬるい風ばかり寄こしつづける扇風機を足先でゆるく小突いた。

二

蟹を逃がして部屋へ戻った。寝不足のたるさがふたたび全身にのしかかってくる。鍋を火にかけてインスタントのコーヒーとトーストを準備するとテーブルへ戻り、パソコンを立ちあげた。いくつかの求人サイトからのメールに目を通すが、これといったものは見あたらない。求人サイトの一つを見に行くと、昨日の夕方までに電話で結果を知らせると言っていたのはかかってこなかった工場が、まったくおなじ条件でアルバイトを募集していた。その面接に行く前日、たまには帰ってこいとまた父親に電話させられたという、母親のなかば呆れたような声が脳裏に蘇ってきた。溜息を洩らし、神戸新聞のウェブサイトで記事を適当に選んでは、文字を追っていく。灰皿を手前に寄せて、煙草に火を点ける。顔にかかる煙に眉をしかめながらリンクを辿っていると、一つの記事に目がとまった。神戸市内で起きた殺人事件について報じられていた。もう一度コーヒー

を啜り、ふたたび、今度はゆつくりと、慎重に、文字をたどっていく。憶えのある名前の女が、知らない三十代の男によって殺されていた。字の連なりをもう一度確認し、茫然とした心地となって、銜えていた煙草を灰皿に置いた。

二人とも、以前勤めていた、西宮にあるコスモス園という民間の障害者福祉施設の間人だった。瀬尾京美という、女の名ばかりに囚われ、ほかの記述はあまり目にとまっていなかった。二重まぶたの奥で光を受ける鶯色の瞳が印象的で、まわりのみんなからかわいがられていた彼女は、施設に預けられている人物だった。犯人は、どれくらい前までか、楠原とおなじように介護のアルバイトとして働いていたらしい。楠原のほうは住みこみでの勤務だったのだが、犯人がどうだったかまでは書かれていない。同棲生活を営んでいたある日から施設に戻りたいと言い始めていた瀬尾との口論が募って、思いあまって刃物で刺してしまい、自分も死のうと考えたが恐くてできず、あくる日の午後に自首したとあった。

瀬尾京美は小学低学年のころに起きた父親の自動車による事故で双親とも亡くし、身寄りがなかったために孤児施設に入れられていた。そして十八になったころ、当時そこに勤めていた、コスモス園の園長が、独立して施設を新しく創る際に引き受けた。幼いころに受けたあまりにも強い精神的な打撃によってそうなってしまうことはままある。預けられている女性に特別な好意を持たれた、あるいは持つてしまったと、わずかな兆しでも見え隠れするようになる。とたんに施設内に話がひろまって男女ともにまわりから常に警戒されるようになり、一度でも手を出したと知られてしまえば、たいいていすぐに職を言い渡される。もっとも、もし初めに好意を寄せたのが瀬尾のほうであったとすれば、過去におなじような経験を何度もくりかえしているのにもかわらず呑気にみずから進んでまわりに洩らしてしまいうから、現実にはより早く、順調に露見することとなる。

そうした中で、仮に犯人がまだ勤めをつづけているうちに瀬尾が失踪してしまえば、誰が真つ先に追及を受けるかはすでに見えている。園を離れたあとならば、すこし遠いところへ引越してしまえば多少は姿を晦ましつづけることもできるだろう。実際、現場はコスモス園の最寄りよりも離れた駅のあたりで、およそ二年のあいだ失踪しつづけていたつわもののひそんでいたという町よりも、もうすこし遠くなる。

古いマンションの幾部屋かを買取った寮でなに一つ不自由なく暮らすことができ、三度の食事も、ときおりは彼女もぎこちない手つきで手伝いはしていたものの、ほとんどは施設の職員や、月に何度かボランティアとしてやってくる韓国料理店の店主が作ってくれる。そうした、我が

しくて、園には似たような人がほかにも二人いたのだけけれど、瀬尾は知能の発達具合ですこしばかり遅れをとってしまい、読み書き計算がまともにできず、そのころには盗癖までがあったらしい。また、男性に対する依存心が人一倍強くて、誰かを気に入ればすぐに頼りたがり、感情に流されるがままに職員やアルバイトと関係を持つとうとし、中絶を経験したことさえあったと楠原は耳にしていた。十一年前の七月、大学受験に失敗した楠原がコスモス園に勤めだしたころには二十九になっっていて、盗癖だけがおさまっていた。

記事には瀬尾が四ヶ月前から施設から姿を晦ましていただけであるが、加害者はおそらくそれより以前にすでに辞めるか解雇されるかしていたことだろうと、園の事務所であったプレハブの白い建物を思い描きながら考えた。コスモス園に預けられている人間がある日突然ふらりと姿を消してしばらく帰らなかつたりすることはときおり起こることで、二年が過ぎたころにやっとホームレス然とした風体で町なかをさまよっているところを見つけたというつわものの例を聞いたことがあるし、当人から誇らしげにその武勇伝を何度もくりかえし聞かされたこともある。施設を抜け出した瀬尾を犯人が家に隠し、そうしておきながら平生と変わらぬ様子のまま園へ勤めに出るといふことも、ありそうだ。しかし、施設で働く男が、彼女に限らずとも、

家にいるも同然の生活をつづけていたのが、ある日を境に、遠く離れた場所での同棲生活を始めることとなったわけだ。傍（はた）から見れば瀬尾は、あどけなさの多分に残る顔つきのおかげで、ほんとうの年齢よりもずいぶん若く見えるというだけにすぎない。楠原も初めに一目見たときには、義務教育を終えたばかりの子が進学はせずに早くから社会に出て働いているのかと、しきりに感心していたものだった。これぐらいのことであれば一般にもありうることだろう。

しかし実際に一緒に働き、言葉をいくつかわ交わしていくうちに、瀬尾が内に抱えているものがだんだんとこちらへ伝わってくるようになる。話すときの話題といえはコスモス園での些細なできごととか噂話、雲のかたちがなにに似ているとかいったことばかりで、ことに他人の噂話などは何度でもおなじ話題が出てきたりするし、背景だとか心理だとか、すこしでも込み入った部分にはまず触れることはなく、うわべの単純なことがらのみを追うことで終わってしまう。

いつだったか、おなじ施設にいる、泊（とまり）という、瀬尾よりも六つ下の、ダウン症を抱えた男性について彼女が意地悪く言いすぎたことがあって、弁護しようと当人の心の綾の部分について注釈を加えようとすると、初めはおとなしく聞いているものの、早いうちから遠い目つきになり、すこししか進まないうちに、なんかようわからん、もうえ

部分もあるかもしれないが、それがはたしてどの程度のものであったろうか。さほどの変化はなかったものとして、瀬尾と一緒に暮らすことになったとき、犯人はきつと、自分であれば彼女を大事にしていけるし、きちんと養うこともできると信じていたことだろう。みずから選んだ女の抱えているものについて、犯人ははたしてどこまで見えていて、また、どのように考えていたことだろう。多少は見えていたとしても、長い年月を重ねていけばそのうちどうにかなるだろうと、そう重くは捉えきれなかったに違いない。ずいぶん浅薄な男として勝手に想像してしまうが、そうでなければ、瀬尾とコスモス園とのつながりを絶とうとするようなことはできなかったはずだし、殺してしまうことにもならなかったはずだ。

痛かっただろうな。胸の内つぶやいて、犯人に殺される瞬間の瀬尾の姿を思い描いてみた。しかし、脳裏に結ばれた像は、まったく別人の姿としか捉えることができなかった。さきほどまでのように平生の瀬尾の姿を思い出し、とみると、こちらはすぐに、はつきりと浮かんでくる。そこに顔の見えない犯人を登場させ、手にしている刃物で瀬尾の腹を刺させてみると、やはりとたんに、その女が彼女自身であるという実感が落ちてしまう。息が詰まり、まぶたの裏が熱を持って疼き始める。電灯のあかりがわずかに翳った気がして、見あげてみるが、なにごともない。

えよ、とそっぽを向いて話を切ってしまった。また、話し相手の他愛ない冗談に対しても、あきらかに嘘だとわかるものでない限りはかならず真に受けていた。作業所のパン屋での仕事のときなどは、小麦粉などの計量をおこなう際に、二桁と一桁の計算はまだなんとかこなせはするが、これが二桁と二桁、三桁と二桁となると、たとえ紙に書こうが、とたんにおぼつかなくなってしまう。割算は全滅だった。しかしこれはけっして彼女に仕事を覚える気がないというのではなかった。よくお喋りなどして落ち着きのない様子を見せはするものの、自分に課せられた仕事をなんとか覚え、こなしていこうと、要領だとかを書き留めたメモを常に持ち歩いていたし、ほかの預けられている人らを指導したり、楠原が初めて勤めだしたときなども、何度でも丁寧に仕事を教えようとしてきた。もっとも、瀬尾が教えてくれたり自信たっぷりな態度で助言してきたりする内容はどこかしら間違っていることのほうがはるかに多く、もし言われたとおりのことを実行してしまうと、たいして失敗してしまうのだった。そしてその場ではすまなさそうに謝るときはするものの、日が過ぎてしまえばまた胸を張っておなじことをおなじぶうに教えてくる。

これが彼女自身、すくなくとも楠原が施設での勤めを三年で辞するまでのあいだおこないつづけてきたことなのだった。辞めてから八年のあいだで、いくらかは変わった。灰皿の縁に置いていた煙草を一口だけ吸って揉み消し、コーヒーを飲んだ。音量を上げたテレビの音が隣室から洩れ聞こえてくる。コーヒーを味わいながら、そういえば瀬尾はこの飲みものが苦手で、こちらがいつも旨そうに口にしているのを見ていて、自分もすこしは慣れようと試みたもののすぐに苦いと眉をしかめてよこしてきたことが何回もあったな、と過去を懐かしむ気持で思い出していた。あの甘ったるくてたまらない、缶のカフェ・オ・レですら駄目だったんだっけ、と記憶の中に叱りこんでいるうち、瀬尾京美が死んだという知らせを素直に呑みこめないでいる自分に気づいた。いや、というよりもそれは、瀬尾のことを思い出すにつれて静かに募る、なにかの間違いであってほしいという願いへ縋りついていようとすると、自分自身の心の一部分だった。大きく息をついて目を瞑り、立てた両膝にまぶたを押しつけた。まぶたの裏にひろがる闇の中で灰白い光の粒子がゆっくりと動きだすのを見つめ、脳裏に次々と湧き出てくる、瀬尾についての記憶をやりすごしてしまおうと試みる。目と鼻の奥に熱の塊が生じ、鼻すじが鈍く痛んだ。全身の皮膚の下が重く疼き始め、さまざまな場面や姿が脳裏に再生されることに、彼女の気配が部屋の中に満ちていく。

なに暗い顔してるん、と瀬尾の笑いをふくんだ声が肉声ほど近い感触で耳の奥からにじり出てきて、顔をあげて

まぶたを開いた。圧迫から解放された目に部屋の様子がぼやけて映る。焦点が徐々に定められ、ゆっくりと一つの輪郭へとまとめられていこうとする景色を見てもなしに視界におさめ、脳裏に映る瀬尾の姿を眺めていた。横から顔を覗きこんでくる格好で体を寄せてきて、てのひらを背にそつと載せてくる。なにも思えないこちらの態度に当惑したか、瀬尾は鳶色の目をいったん脇へ逸らし、てのひらを背からはずしてあたりを眺め始める。

寮のある尼崎のマンションからほど近い、ちいさな神社の境内だった。仕事で疲れたときなどに楠原はよく一人でこのベンチに腰かけ、真向かいにある杜の、武庫川へと抜ける小路をほんやり眺めなどして、ゆっくりとした時間を過ごしていた。ときおり野鳥の姿がはつきり確認できたりと、とくに心安らいだ。以前には、どこからか迷いこんできたらしいセキセイインコの姿もあったが、何日も経たないうちに見かけなくなってしまった。よく人に馴れ、たくさんさんの言葉を覚えていて、甲高い声で熱心に「はとぼっほ」をうたった。

黙りこんでいる楠原の横で瀬尾はしきりに足をぶらぶらとさせ、ときおりあくびをしては空を見あげていた。そういやさ、さっきの柏餅、おいしかったなあ……でもさ、子供の日って九月やつけ、と彼女が不意に思い出したように言うのに、五月だよ、と答えると、ええ、もうとっくに過

ぎてるやん、いまごろ食べてるん、と笑い、そんなんでいいんかなあ、とこちらへ目を向ける。楠原はなにも答えずに相手の顔をじつと見ていた。見ているうちに、瀬尾の目に残されていた笑いの影がすこしずつ引いていき、瞳がこちらの視線を強く捉えて放さない。内に光のこもった鳶色の瞳を見澄まして、楠原は前の晩に向き合った、同居人の目を思い出していた。

前年の八月、ちょうど勤め始めて一年が経ったころから、楠原はコスモス園の寮に住みこんで働くようになっていた。職員、アルバイトを問わず、寮に住みこんで働くときには、介護を兼ねて、かならず施設に預けられている人のうち誰かと暮らすことになるのだが、この年の五月からは、当時三十代のなかばに差しかかったばかりの男を任されていた。男はもともと知能が遅れがあつたほかに、小学生のころに起きた転落事故のおかげで両脚が利かなくなり、車椅子生活を余儀なくされていた。朝と昼とはそれぞれ別々の仕事をしているので互いに顔を合わせる機会はほとんどなく、介護の内容は主に彼を風呂に入れることと、毎日の個人的な楽しみとしている、さまざまな人たちへの手紙を彼の口述に従って代筆することだった。不自由な発音によつて語られる単純な箇条書きの手紙を一晚のうちに何通も書かされるので、彼の介護をまかせられることとなったときにはまわりからずいぶんと励ましの声をかけられたものだった。

ある程度湯に浸からせてから男を風呂場から出すと、楠原はゆっくりと入浴を始めた。衣服を身につけるぐらいのことは自分一人のできるし、部屋の中での移動も、腕を用いてできるので、それ以上のことはしてくれなくていいと本人から言われていた。体と髪を洗って湯に浸かり始めたとき、男を風呂場へ入れる前に財布をテーブルの上に置き放しにしていたのを思い出した。あとでちゃんとしまっておかなきゃな、とそれ以上はなにも考えずに水滴の浮いた白い壁をほんやりと眺め、体がぬくもつたところで湯から出た。

が、不明瞭な発音については自身の発する言葉の他人への伝わりかたから察することができ、文章を書くののも昔から嫌いではなかったこともあつてか、言われるほどのしんどさは感じずに済んでいた。一通を書きあげることにならず全文を音読させられ、内容を聞き間違えていたり、文脈や文法があまりにもおかしいからといってこちらで勝手に修正したりしていかどうかの調べを受けなければならぬのはたしかに煩わしくはあつたものの、それもその都度、この手紙を出すという行為が男にとってどれほど貴重なものであるかとあれこれ自分勝手に想像しているうちに気にならなくなった。それにしても、彼自身の親族をはじめとして宛先はほんとうにさまざまどころへ散らばっていて、どうやらコスモス園でのバザーや演奏会などを通じて知り合った人たちへ手あたりしだいに送っているらしいのだが、住所録に記されている名前は圧倒的に女性のものが多く、内容も、ひどいときには二、三行の時候の挨拶だけで済まされてしまうこともある男性への手紙とくらべて、女性に出すときのほうは、あきらかに饒舌だった。そのことについて前日の夜に男の散髪したての頭を洗いながら触れてみると、そんなことないよう、と笑っていた。そうかなあ、おかしいな、とこちらも笑って受け、頭の泡を湯で流すと、両腋の下から腕を通して、男の体を浴槽に入れた。

パジャマをつけて居間に戻ると男がテレビへ向かったままおかえりと言い、あとで手紙書いてね、と半身を振って頭をさげてきた。楠原はテレビドラマの流れている画面から男の顔に目を移してうなずき、財布を取って部屋の隅へ向かった。柱のフックに掛かっている鞆の手前まで来たときに、ふと財布に入れてあるレシートをいがかげん捨ててしまおうと足をとめ、十枚ほどの紙きれをごみ箱へ落とす。捨て終えたときに札入れの部分に違和感を覚え、見てみると、そこにあつたはずの千円札三枚がすべて消えている。驚いて、財布をあらためて調べてみるが、小銭やカード類のほかはやはりすべてなくなっている。そんなはずはないと知りながらもごみ箱に手をつっこんでみるが、見つからない。テーブルに置くまでのあいだには千円札はたし

かに入っていたのか思い出そうとし、男の依頼で切手を買
いに近くのコンビニエンス・ストアへ向かい、品物と釣り
銭とレシートを本人に渡したときには間違いない人って
た、とはっきりした記憶を手繰り寄せた。だったらいった
いどうしたんだろう、と眉をひそめ、なかば泣きたいよう
な心地になりかかってきたところへ、どうしたん、と男の
声が聞こえる。なんでもないよ、と答えようと顔を向けた
刹那、いつか男との同居が決定したときに、男はそれまで
に担当していた人物とは違って、かつての瀬尾とおなじよ
うに盗癖があるので、財布や鞆を手の届く場所に置いてお
かないように、との忠告を何度か受けていたことを思い出
した。もう一度財布のあちこちをたしかめ、ごみ箱を覗い
てみるが、おなじことだった。やはりこれはもしかすると、
盗られてしまったということなのだろうか、と胸の内に湧
き起こってくる疑念に抗うようにして、天井を仰いだ。置
き放しにしたのは、これが初めてではなかった。

ねえ、どうしたん、もしかしてお金なくなっただ、とふ
たたび男の声が聞こえ、うん、どうもそうみたいやわ、と
答えて相手のほうへ目をやると、え、どっかで落としたん
かな、と心配そうな面持ちで見つめてくる。いや、さっき
風呂入る前に切手を買に出たときにはあったし、帰って
きてお釣りを渡すときにもちゃんと入ってたのを憶えてる、
と男のきつい斜視の目を見つめ、次の言葉を待ってみた。

れないでいるのに気づいた。下着などが強引に押し詰めら
れている端のほうに、千円札の姿がちらりと見えている。
まさかと思ひ、首を伸ばしてみると、ちょうど三枚が無造
作に突っこまれているようだった。

それじゃあ、悪いけど、と楠原は笑いをおさめ、男の顔
を見る。遅れて相手も顔から笑いを消した。おれも疑いた
くないんやけど、こんなこと。一緒に暮らしてるわけやし
さ。でも、いまは状況が状況やし、ごめんやけど、ちよつ
とその抽斗開けて中見せてくれへんかな、とゆつくりと頼
みこむふうにして言うなり、男はすぐさま抽斗を両手で押
さえ、違うよ、これは楠原さんのじゃないよ、ほくは盗っ
たりなんかしないよ、ほんまに、と首を激しく横に振り、
声を荒げた。いや、違うやろうと思うけど、ちよつと見て
みるだけやん、と手を伸ばしかけると、違うつてば、とと
たんに払われる。両腕をひろげて抽斗を庇い、こちらを睨
みつけてくる同居人の姿を見て、呼吸が圧迫されるのを覚
えた。ほんまに、盗ってへんの、と尋ねると男は黙ったま
まうなずき、じゃあ、見せてくれたつてええん違う、そう
したら信用するし、と言うと首を激しく横に振る。

互いに息を押し殺しての睨み合いがつづき、痺れを切ら
した楠原が、いいから見せてよ、と一歩足を踏み出して抽
斗へ手を伸ばしかけたところへ、駄目だつてば、という大
声とともに男が脚にしがみついで、全身で押し返そうと力

もし盗ってしまったているのなら、こちらが追及するより
も先に言ってしまったつてほしいと願っていた。彼ら施設に預
けられている人たちは、一日五百円の小遣い以外には金を
得る機会がないと、職員から聞いている。そうなれば、月
に七万の給料を貰っている楠原よりも、三千円の価値は大
きいだろう。ここで言ってくれば、すこしぐらいならな
にか奢つてもいい、とそこまでの気持になりかかったとき
にも、相手は心配そうな顔つきを崩さないまま黙りこんで
いる。テレビの音声がむなしく流れる。ふと、男の口もと
がゆるみ、なにじつと見つめてんだよう、と体を振らせて
笑った。それでもなお目を放さずにいると、男はすぐに面
持ちを平静に戻す。

その様子をつぶさに観察しているうち、相手の目の内に
表情の変化がないのに気づいていた。そこだけが無表情で
あると言ってしまったもおかしくはない同居人の目を見据
えていると、だんだんとかたくなに胸の内を鎖ざれている
気になって、なんとかそこに表情を滲み出させてやりたい
という欲求がこみあげてきた。

風呂呂に入ってたあいだ、誰か部屋に入ってきたりせん
かった、と尋ねてみると男は頭を振って、ここに入つてき
たって、盗るものなんてないよ、と笑う。それもそうだ、
と合わせて笑い、殺風景な部屋のあちこちへ目を走らせて
いると、背の低い筆筒の、一番下の抽斗がきちんと閉めら
をこめてくる。放せ、いいから見せろつて、と楠原は身を
振り足を引き摺つて離れさせようと試み、相手がますます
強くしがみついでくるのに、こころもち腰を落として両手
で思いきり顔を押しやる。それで体が動いてくれるはずも
なかったが、顔をあらぬ方へ押しやられている状態に耐え
かねた男が脚から右腕のみ放して楠原の腕をつかみ、爪を
立てた。痛つ、と楠原は叫び、何度も全身を大きく振らせ、
やがて男の体が離れたのを蹴りつけようとするが、バラッ
スを崩してしまつて目標がまったく定まらない。今度こそ、
と相手を睨み据えて腕を振りあげるも、ふとここで手を出
してしまつたらあとでまわりからどんな非難を受けるかわ
かったものではないと思ひあつたとたんに醒めてしまつ
て、両腕で顔を庇う男を見やりつつ大きく深呼吸して腕
をおろし、左腕のちくちく痛むのを意識しながら喉の奥で
声かふるえかけるのをこらえ、ほんまに、違うんやな、と
問いかけた。

違うよ、と男は一言大きな声で言つてうなずき、荒く鼻
息の音を立てる。鼻の穴から黄いろい鼻くそがひらひら
りと覗いている。こちらへ向けられつづける目の奥に見え
る光は、さきほどまでと同様にまったく動く気配がなく、
濁りとも淀みとも違う、なにか厚い寒天質のようなものに
覆われているふうに見えた。黙つたままに楠原を尻目
に、男は千円札を肌着の下へ押しこんで抽斗をきつちりと

閉め、テレビ台におさめてある住所録と筆記用具を黙々と準備し始める。楠原はテーブルの前に胡坐をかいて、爪を立てられたところの皮膚が薄くめくられて血がちいさな赤い球をなしていくのを見つめていた。

「しゃあないで、あの人のことやもん、自分でまたぶん、わかってへんと思うし……園長にも言うたほうがいいん違うかな、と瀬尾が溜息交じりに言うのに、うん、言った、嫌だったけど。園長からも話をしてくれて返してもらえるかどうかは怪しいらしいけど、と応えると、そっか、まあ、たしかに諦めといったほうがいいかも、と苦笑しそうにちいさく笑った。やっぱりそうかな、と力なく受けてしばらく地面へ目を落としていると右肩にゆるく重みがかかってきて、なんだと首を捻ってみれば、瀬尾の短い髪をした頭があった。重いよ、ととっさに肩を動かすのに相手はごめんと素直に頭を起こして、なんか元気なさそうやっだから、となにやら意図ありげなことを言う。これは、と思いつながら、そう、でも、大丈夫だから、とまともには取り合わないふうを見せ、尻をずらして体ごと離れてみるが、とりとめのない話を始めるうちにまたこちらへとだんだん寄ってきて、しかし今度はすぐに凭れかかっている目をしきりに動かし、ゆっくりと上体を揺らしている。帰ってしまったほうがよさそうだな、と頭の中でくりかえしはするものの、楠原は瀬尾の他愛ない話に腰を落ち着か

の姿や声が胸の内から掻き消されつつあり、瀬尾への愛おしさが、抵抗を内に孕みながらふくれあがっていく。

右の半身に、瀬尾の体が凭れかかってくる。てのひらが左手に載せられ、潤んだ瞳が面前にあらわれる。相手の息遣いがはつきりと聞こえる。どうすればいいのかわからず、楠原は息を詰めて相手の目を見つめる。なにか言ったほうがいいのだろうか、などと思案しているうちに瀬尾がおもむろに唇を近づけてきて、間近いところで戸惑うような息をかすかに洩らして動きがとまる。とたんに自身の上唇へ意識が向かい、やはりこうなるのか、と目を伏せかけたところへ、唇が重ねられてきた。背に腕がまわされ、楠原もそれに倣って女の体をゆるく抱き、相手の振れた体勢がつかさうと見てゆっくりと立ちあがると、互いの体が自然と正面を向き合い、瀬尾の腕に力がこもる。楠原も慌てて腰を引き気味にしつつ腕の力を強くし、されるがままに相手の舌が唇を割ってきて、はじめてのことに戸惑いながらも受け入れる。いつか観た映画の、似たような場面が思い出された。やがて相手のほうから唇が離され、下唇、やわらかい、と囁く瀬尾の声に、茫然とした心地のままゆっくりとうなずく……。

ほんとうに、彼女は死んでしまったのだろうか。ノートパソコンの画面に目をやるとそこには瀬尾京美という名があり、その横にある年齢も、計算してみるとびたりと符合

せてしまう。

瀬尾からの好意について二ヶ月ほど前に同居人から聞かされ、その二日後には瀬尾の同居人である女職員から、過去に瀬尾と関係を持った男たちがごとく辞めさせられていった例を引き合いに、忠告を受けていた。当の女職員がいま目の前で自分のために話しかけてきてくれているという状況に緊張しつつひそかに喜び、なるべくたくさんそのほつそりとした姿を眺めていようとがんばっていたものだったが、不思議と内容はきちんと押さえていた。そのときの話を頭に蘇らせて、楠原は瀬尾の鳶色をした瞳を見つめ、そこからだんだんと彼女の顔が孕んでいた不調和が薄れて、今年でちょうど三十になる女性だと違和感なく得心できる面相が立ちあらわれてくるのを見入っていた。女職員の言葉がだんだんと頭から離れ、空白がひろがってゆく。自身の心の動きを怪しみ、また警戒しながらも、楠原は瀬尾に惹かれてしまいつつある自分に気づき始める……。いや、そうではなかった。男から瀬尾の好意を聞かされてからますます女職員その人のことを意識するようになった、自分自身の心理についてあらためて思いやられ、ともすると簡単に振れ動いてしまいそうになるのをなんとかこらえようとかまえていた姿勢が、自然と解れていこうとするのを感じていた。あたりが静けさに満ち、全身が熱に包みこまれていく。自身の心音が耳の奥に響き始める。女職員

するのだった。それは何度確認してもおなじなのだろうし、おそらくはほんとうに、彼女は死んでしまっているのだろう。頭ではそう考えるのだけれどそれを実感としてつかむことがどうしてもできず、記事の内容が自分にはまったくかわりのないもの、ここに似た別の世界で起きた、もしくはいま現在起きていることなのだったといった錯覚がしつこく残っていた。落ち着きの悪さを紛らわせるため煙草を一本銜え、火を点けた。ふと、携帯電話に目が行く。瀬尾の声が耳の奥で蘇る。時計を見ると八時で、もうそろそろ作業所のパン屋での仕事も一段落ついているころだろう。番号を調べてかけてみれば、記事のことがたしかなものとして実感できるに違いない。煙草をいったん灰皿に置いて電話に手を伸ばそうとするが、途中で引っこめた。まともに喋ることができずかどうか、おぼつかなかった。あ、もしもし、と声に出してみる。喉の底で声がわかまる。もしもし、もしもし、あ、楠原ですけど、あの、と今度はゆるく握った拳を頬のあたりにやって、ときおり辞儀もしつつゆっくりと言う。目を剥いて背を丸め、口もとにどうにかして微笑を浮かべようとしている自分を横から見ている。もしもし、あの、もしもし……。

隣室からテレビのものとは別の笑い声が聞こえてくる。そのあとすぐになにか話をしているのが聞こえ、電話をしているのだと呑みこめた。楽しそうにしているな、と背を

もたせかけた壁の向こうへ耳を傾け、架空の電話を手放して、小窓から見える空を眺めた。

三

賑やかな話し声を、眠りの中から聞いていた。隣室に二、三人の男がやって来ているようだった。はしゃいだ声でなにやら話しているところへ唐突に笑いが湧き起こり、いったんひそまったあと、ふたたび話が始められる。内容の詳細については、聞いたそばから頭から離れていくので、なかなか把握できないでいた。これからどこかでフットサルの試合があるのだということだけが、漠然とつかみ取れた。まだ眠りの境をうろろしているうち、隣室がしんと静まっているのに気づいた。寝返りをうって時計を見ると十二時をまわっていて、上体を起こし携帯電話のカレンダーに目をやると、面接の予定は入っていない。昨日、なんの連絡も来ることのなかった面接先のことを思い出しもした。パジャマを着替えて、冷飯に昆布の佃煮を載せた茶漬を二杯、胃へ流しこみ、自転車でどこかへ出かけようとガラス戸を閉めた。

部屋を出てから、南にあるちいさな港まで、やはり歩いていくことにした。自転車に乗るよりもゆっくと徒歩で行くほうがいまの気分合っていたし、雑踏の中へ入るよ

りも、静かな場所へ身を置きたかった。

海沿いの道路に出ると、取り残された蟹の死骸が目についた。浜辺を見やると、甲羅の塚が黄いろい砂をほとんど埋め尽くしてしまい、そうなほど増えている。踏みそうになつた死骸を爪先で蹴ると斜め前へとすべっていき、蟹の一方が胴体から離れた。

自分自身のほかに、道を歩いている人は見あたらない。進んでいくうちに波の音が意識の外へと追いやられ、海と向き合うようにして建てられているすべての民家は、日溜まりの中で無防備に背をこちらへさらして深い眠りに就いている。彼らはひたすら眠りを貪り、やがては楠原にとっても彼らが無関係な風景の一部として流れていくだけのものとなる。身の内からひろがる静けさが、蒸し暑さをよけいに際立たせてくる。いま現在の自分自身を思い、瀬尾の姿を蘇らせていた。全身の皮膚の下が疼いて、胸の底へ降りる淀みに呼吸が息苦しい。送る足にだんだんと力がこもる。歩度が増すのを体感するわりにはまわりの景色がうしろへ流れていくのがずいぶん遅く、感覚と足取りとのあいだの空隙をなんとか自分で埋めてしまおうと、息を細めて上体をこころも前へ傾ける。自身の息遣いが頭に響いてくる。だんだんと自分がいまきちんと前へ歩き進むことができていくのかどうかさえおぼつかなくなり、ただ、息苦しい。

気づいてみると、これまで踏んでしまわないよう注意していた蟹の屍にみずから積極的に足を落とし、磨り潰していた。呼吸を整え汗を拭い、うしろを見ると、歩を進めてきたところどころで、すっかり砕けきってしまった死骸がへばりついている。それを見て気分がおさまることとはなかったが、やめておこうという考えも起こらなかった。甲羅のそばを通りかかると立ちどまり、膝をあげて踏み潰してはアスファルトに擦りつけた。歩く足も自然と屍のあるほうへと向かい、楠原はただ、蟹の潰れる

乾いた音だけを耳の奥でくりかえし聞く。人の気配がして足をとめ、視線をあげた。斜め前から老婆がゆっくと歩いてきて訝しげな目をじつとこちらに向けながら通り過ぎ、民家の一つへ入っていく。終始無言のままだった。楠原は老婆に嘲られたと感じ、すでに砕けてしまっている足もとの甲殻をさらにすり潰し始めた。どこ

の誰や知らないが、ええ若者が働きもせんと昼間っから歩きまわつてる。脳裏に浮かんだ老婆はそう言って眉をしかめ、口もとをゆがませている。なにも知らない人から見ればそう思われても仕方ないことだと胸の底で認めながらも、楠原は老婆の声を耳の奥から掻き消してしまいたいと乾いた音をしつこく立てつづける。立てつづけているうち、老婆は次から次へと楠原の陰口を誰かに漏らしていく。もうじき三十になるといふのに、世間様に恥ずかしくないのか、

といった内容の言葉が、こまごまに私たちを変えながら流れてくる。思えば一人暮らしを始めることにしたのも、学生でもない奴がいつまで親に頼つてばかりいるのかと、職場ですつと言われつづけていたことが理由の一つだった。

あまりにもこまかく砕かれつづけてとうとう足もとの甲殻が二つ三つ消え去ってしまったころ、気分が鎮まりつつあったのか、楠原は老婆が最初からこちらを見ていたわけではなかったことに気づいた。前から人が来ると思い、視線をあげたときには老婆は歩きながら海のほうへ目をやっていた。その様子をじつと見つめ、なにげなく顔をこちらへ向けた老婆の視線を食い止めさせたのは自分のほうだった。姿が消えた蟹らしきちいさな破片が一つ、目についた。ついさきほどの自分自身を脳裏に見つめ、楠原は足早に歩き始める。電柱の陰にひっそりとある雑草がゆらりと揺れた。足をゆるめて空を見あげると、鳥が数羽、港のほうへ飛んでいった。

港に入ると、潮のにおいが濃くなった。コンクリートの地面に日干しされている舟の手前で立ちどまり、てのひらで汗を拭いた。風がないためか、ここへ来てよけいに暑さが増すようだった。地面の縁から水の跳ねる音がかすかに聞こえ、波の音があとにつづいて届いてくる。別の方向から鳥の声がし、楠原はこの先さらに海沿いを東へ行ったと

ころにある、鳥たちの溜まり場を思い浮かべる。猫が舟の作った日陰へ入り、だらりと横になって目を瞑る。

ほどよい静けさの中に身を置いて、楠原はわりと冷静に瀬尾についての記事を反芻することができたのだが、今朝と変わらず、何一つ実感のつかめないまま言葉が流れていくばかりだった。胸の底から湧き起こってくる情感はありはしたが、それがはたして悲しみなのか犯人への怒りなのか、はつきりとした輪郭を捉えることはできない。呼吸が重くなり、頭の中が白く濁っていく。水の音がより硬く、鮮明になって耳についてくる。全身に軽い疼きが巡り、なにかが自分を衝き動かそうとするのを覚える。呑気に眠りつづける猫の姿を眺めて、どうにか気を逸らせてしまおうと試みた。猫は片耳をぴくりとさせて薄くまぶたを開いてあくびをし、顔を前足で擦るとまた眠りのつづきに入った。

ゆるやかに動き始めた風に運ばれてくる潮の香りが、蟹の蠢く様子を脳裏に蘇らせる。夜の明けきらぬうちから部屋の中へと入りこみ、暗い目をした、表情のない人間の顔を浮き彫りにした甲羅を見せてひしめきあう。なにを語りかけてくるでもなくただ黙々と、こちらへ目を凝らせつつ呼吸し、人の手により捕らえられていく。指に胴体を挟まれた恰好のまま蟹を持ちあげて威嚇し、殺められるべく力がこめられだすと、圧迫の加えられているあたりへ懸命に蟹を伸ばし、それぞれの脚で空を掻いて泡を噴く。親指が

音を立てて腹に深くめりこみ、大きく痙攣して動きがとまる。毎年、この時期になればかならずおこなわれる。昔より数が減ってきたという話も、聞いた覚えがない。いちいち気にしていないためにそう思うだけかもしれないが、いくつかの蟹は生き延び、海へ帰っているということも、理由の一つとしてありそうだ。深い海の底、岩陰や砂の中にじっとひそんで、近づいてきた獲物をすばやく捕らえ、生きてゆく。ときおり起こる大きな潮の流れに煽られて身体が浮きかかり、無防備な体勢のまま、自身よりも大きな敵の餌食となってしまうことも、あるだろう。

大変だな、と楠原はちいさく呟き、今朝、浜辺に逃がした蟹の姿を思い返していた。どうしてわざわざ陸へあがってくるのだろうか、とこれまでも何度か頭を捻ってみたことを、わかりようもないと知りつつ考え、歩き始めた。遠い昔、このあたりが埋め立てられることなくただの海だったころ、産卵の時期が近づくとも集団での移動がおこなわれていたのかもしれない、というのが大まかな自説だった。

幾世代にもわたってくりかえしていくうちに、やがてそれが遺伝子の記憶として深く刻印され、殺されてしまうかわかっていながらも、なにかに導かれるように、あるいは衝き動かされるように、集団での移動が始まる。一部の蟹が目覚め、目覚めた蟹が集まって、刻々と移動の準備が進められていく。そして梅雨どき、雨がつつづいて、海の中に

不思議と感じられなかった。最後に瀬尾と一緒に働いた日のことを思い出していた。

四

十二月初めのころだった。日はすでに建物の陰に隠れ、下面の薄黒く翳った雲が浮かぶ空も色彩を失い、阪神屋敷駅前の広場は、夕闇にすこしずつ鎖されつつあった。冷たい風が吹き抜け、往來する人々の背を縮こまらせる。

一週間のうち月、水、金と、ここで四、五時間程度、パンの曳き売りをおこなっていた。残りの火、木は別の場所だった。その日の当番には、瀬尾のほかダウン症の泊がいた。そこへ楠原を含めた三人が袋詰めのパンを並べたワゴンを前にして、駅舎の入口近くにいた。列車がホームから離れるたびに、多くの人があったに目の前を流れていく。この時期は夏にくらべると客の入りはよかった。寒さをこらえながら大声をあげて呼びこみをつづける姿が、なにがしかの情を誘いもしたのだろうか。パンが三つ入った一袋を手にして、その代金が五百円だと聞くと、かすかな当惑のこもった、思わず聞き返すふうな表情を浮かべてしばらく間を置き、そつともとへ戻してそそくさと立ち去ってしまう姿もあるにはあったが、それでも完売の日が、夏ごろの倍はあった。CDラジカセから音楽が流れ、折りたたみの

起こったならかの変化を感じし、時は今と過去に煽られ、移動が開始される。黙々と海底を進む仲間たちの静かな熱狂に誘われるものが一匹、二匹とほかの仲間内からあらわれ、従って行く。従って行くものが増えるに従って熱狂の度合いが増し、ほとんど無我の境地にまでふくれあがって、雨の降りつづく地上を、目的地を知らぬまま、熱が醒めきるまで黙々と蠢きまわる……。不味くて食べられもしないし気持ち悪いし、迷惑なだけだろう、なにかかわいそうなものか。去年、電話越しに管理人が呆れたような口調で言った言葉が耳の底から這い出てくる。

水溜まりを踏む音で足をとめた。見おろすと、そのまわりで水が激しく揺れている。中は無事だった。水溜まりから足を出し、海を眺めた。ときおり風がそよいで、潮の香りが汗のにおいを追いやった。生きている、みんな。ふと、そんなことを思った。そして瀬尾京美は殺され、いつかは彼女が存在していたという記憶さえ淡いものとなってしまふのだろう。笑い顔が脳裏に浮かんだ。耳の奥で声があった。胸のあたりが重く締めつけられるのを覚える。その影を振り払おうと、今日の夕飯はなににしようかなどと考えてみるのだけれどうまく集中することができず、思考はかえって瀬尾の姿や言葉を一つ一つ鮮やかに、脈略なく浮きあがらせ、浮かびあがってきたものはしかしすぐに掻き消されてしまい、次の場面へ移る。喉の渇きのみを覚え、暑さは

椅子に腰かけ失敗作のバターロールをかじっている楠原の右横で、泊がいつものように立ちあがったまま女性アイドルグループの曲に合わせてうたっている。左横で瀬尾が笑い、いいぞ、泊くん、などと囁し立てる。音程ばかりか歌詞までがでたらめで、ただひたすら熱をあげてうたいづける本人のみがスピーカーから流れる曲と一体になった歌だった。

スーツ姿の勤め人や、買い物帰りか、あるいはこれからどこかへ遊びに行こうとしている若い人たちが、ときおり視線をこちらへ送ってくる。立ちどまって曖昧な微笑を投げかけてきておいて、そのままスピーカーを押し立て立ち去る女もいれば、二人してこちらを見てはすぐに視線はずし、しばらく行ったあとで肩を寄せ合って背をふるわせ、欲楽街のほうへ消え去っていく男女もあった。瀬尾がしきりに、恥ずかしいからやめてよ、と笑い、たまに潤みかけた目をこちらへ向けてはすぐに逸らすのが、視界の端からわずかに確認できた。流れていた曲が終わって、楠原の好きなシンガーソングライターの音楽が始まり、泊がゆつたりとした前奏に合わせて全身をかるく揺すりながらこちらを見てほえんでくるのに、楠原はちいさく笑う。瀬尾が囁すのに泊は笑い顔で左手をあげて応え、右の拳を口もとにやってますます楽しげに、自分なりに女性ボーカルの気怠げな掠れ声に合わせて、首を振ったり、全身を大きく動

かしたりする。仕事にならへん、と瀬尾が背をのけざらせて笑って、どうにかしてや、と腕を取ろうとしてくるのに、楠原はなにも言わずにかるく身を振ってかわし、左の頬へ視線が絶えるのを意識しつつも泊の姿にじつと目をやり、原曲に合わせて指さきでゆつくりとジーンズの膝を叩く。

前日、園長から瀬尾との関係を咎められた。前に注意されてからそれまでうまく隠しおおせていたのだが、いつか隠れて抱き合っていたのを近隣の人から告げ口され、今度の給料の締めに職を退かされることになった。それまでにまた手を出してしまえばすぐに誠にするとも告げられていた。まったく、くだらないことをしてくれたもんだ、と園長は溜息をついて腕を組み、目の前におとなしく座っている楠原を正面から睨んだ。ひとけのない事務所の中に、回転椅子の軋む音が響く。すみませんでした、と楠原がやつのことでも声を絞り出して頭をさげるのに、すみませんでしたじゃないだろう、と低い調子で返し、いったい今度のことではどれだけの人の信用を失うことになったか、わかっているのか、静かな、落ち着いた物言いではあったが、声にはあきらかな怒気が含まれていた。楠原は身をかるくこわばらせて相手の目を見つめ、怖じけを払うふうに深く息を吐いてから、責任は、ちゃんと取るつもりでいました。責任か、と園長は肩をまわして低くつぶやき、誰でもみんなそう言うけどな、簡単なものじゃない。いまは落ち着いて

るけど、あの子の神経がまた乱れだしたとき、冷静に、的確に対処できるのか。ほかにも経済的なこととか、問題はいろいろとある。ゆつくりとそうやってこちらを見つめてくる園長の目には、子を叱り言い含める父親の表情が滲み出ている。声の怒気もだんだんと薄らいで、本来のやわらかな物腰をやがて取り戻しつづつあった。相手の熱心に論ず調子に促されて、楠原は耳をかたむけては自分自身を顧みていた。顧みるうち、ほんとうに自分で大丈夫なのだろうかという疑念が胸の内にくれあがり、反駁を自論む土台の足もとが安定を欠いていく。依怙地にも抵抗の構えを崩さずにいようとすると心も生まれはするが、頼りなく胸に漂うばかりで言葉にならない。沈黙が降り、互いの目を見つめ合った。エアコンの作動音だけが、プレハブの部屋に響き渡る。

経済的な面でしたら、働いてなんとかします、とようやく応えたときには、なかば反省に近い気持ちにまで傾きつつあった。言ってからすぐに、自分が働かねばならないのはあたりまえのことじゃないか、と胸の内自身へ向けて舌打ちしていた。いったいどれくらい稼ぎがあればやっていけるのか、きちんと考えたことすらなかったと、いまさら気づきもした。……ほかの面はたしかに難しいかもしれないけれど、ここでアドバイスをもらったりしてすこしずつ自分たちの生活を築いていけば、なんとかなるように

なっていくんじゃないかと思うんです。初めのうちはたしかに厳しいかもしれないですけど、好きな者同士、互いに支え合っていくことさえできれば、そのうちに……と、ほとんど破れかぶれの心境へと突き進んでいきつづつ言う、聞いててますます不安にさせられるな、と園長は口もとに苦い笑みを浮かべ、感情だけでもの言うてるやろ、とあらためてこちらの目を見据えてくる。感情ですか、と楠原は相手の目に呑まれそうになるの目を逸らしてかわし、すぐにまた元へ戻す。園長はうなずき、ほくだけやなくてな、ほかの人たちもみんな、自分が真面目に働いてくれたことは認めてる。前に三千円を盗られてもうたときも、結局本人がなかなか認めようとせんからうやむやのままやけど、それでも文句一つ言わず介護をつづけてくれて、そういうところに感謝もしてるし、一部の人たちからもな、別に辞めさせてしまふ必要はないんやないかという声も出てるんや。実際、そのおかげで前に注意したときも、もうちょっと様子見てみよう、いうことになってたんや。でもな、それもまた、所詮は感情にしかすぎんわけや、と園長がつづける。ほくらがやつてるとはな、あくまでも仕事なんや、ハンディを抱える人を預かるという、大きな責任を負った。ともすれば社会から見放されたままになってしまふような人たちを、まわりに頭さげて、たとえ隅つこのほうであろうと、ちいさいパン屋やったり、空き缶やら廃

品を回収してまわったり、内職したり、いろいろやらせてもらって、すくなくともなんとか自分らで金を作って、社会の一員として居させてもらおうとするのがぼくらの抱える使命なわけや。いくらすくなくともこれで金を得て、飯を食わせてもらってわけや。そうなるも当然、責任が生じる、信用が大事になってくる……。まわりの人らとおなじ社会の一員として認めてもらうためには、この努力をずっとつづけなあかんわけや。そこへこんな色恋沙汰を持ちこんだりしたら、どうなる。ぼくらを信用して彼らを預けてくれている人はもちろん、世間から見てもどんなふうに見えるか、考えられないか。……まあ、実際難しいと思うよ、ぼくやら自分やらは結局、そこまで考えとんでも問題なく生きることはできてしまふんやから。でも、ぼくらが抱えているこの使命を全うしようとした場合、もしそんなことしたら、これまで築きあげてきたものが一気に危うくなってしまうということが、まったく想像もつかんか。いいえ、わかります、でも、と楠原は園長の目を上目遣いに見返し、好きになったりするの、仕方ないんじゃないですか。自然のことですし。

ああ、好きになるのはいいよ。たしかに防ぎようもない。でも、それを行動に移してしまつていいかどうかは別の話でな。ましてや相手が瀬尾さんとなると、たとえば恋愛と結婚というものをそれぞれ区別して考えるということが、ろで車から降りし、そのままどこかへ行方を晦ませた男もいたらしい。

話を聞かされているうち、楠原は自身の瀬尾に対する気持を顧みていた。話が進むにしたがい、瀬尾との生活を営んでいく自信が萎んでいくことに苛立ちの混じった惑いを覚え、同時に、自分が件の男たちとおなじように、瀬尾に對して抱えている強い同情により心が動いていたことをはっきりと認めていた。自分はそういうふうにはなるまい、なるはずがない、という意思もあるにはあったが、女に頼られて地を踏む足がにわかには浮きかかり、視野の狭まるのもかまわず、ひたすら自分で自分を昂揚させつづける男たちの姿が、ちょうど自分自身と重なって見えてしまうのはどうにもならない。ふたたび園長と目が合い、すぐにまた視線を逸らす。自然と息がひそまり、園長の声以外の音がすべて、ゆっくりと、耳から離れていった。

それからというもの、園長からの戒めが頭を離れることはなかった。これまで瀬尾との関係を結んできた男たちと同様、相手への憐みにより心が動きつづけてきていたのだとはつきりと自覚させられた。また、そうする中で、幼いころから学生生活の終わりに差しかかるまでのあいだ、まわりの級友たちから、いわゆる健常者として認めてもらおうと、彼らと一緒になって養護学級の生徒たちへ石を投げていたことをも思い出してた。結局はこちらの思惑どお

あの子には無理だから。相手がどんな男であろうと、その男と一緒にすること以外には頭が行かなくなる。まわりからの意見はすべて、ただの雑音にすぎなくなる……。

以前に瀬尾の同居人である女職員から聞かされていた、瀬尾を連れ去った男たちがそれぞれ蒼白い顔をして語ったというのとおなじ話だった。相手の男も初めのうちは瀬尾に對する強い同情もあつて、なんとか生活を成り立たせ維持していこうと努めるのだが、一緒に暮らしていくうちに互いの違いが、施設で顔をつき合わせていたころよりもはつきりと、身をもつて感じられるようになり、これまでとくに不満とも思っていなかったことがしだいに重荷へと変わつていき、初めのうちこそ相手から身を擲つて頼られているということに気をよくしていた男が、縋りつくことしかできない女のことを、だんだんと疎ましい存在と見るようになっていく。それでも施設から引つ張り出した責任というかうしろめたさもあつて、男は女の保護へまわろうとなんとか心を向かわせるのだが、自分の行動に對する後悔がどうしても背後からつきまとい、突然やけになって喚きたてるか踊りだすかしたくなる衝動に駆られてはなんとか抑えるということが、何度かやつてくる。男は自分のそうした精神状態に恐れを抱き始め、表情を変えないまま取り乱し、結局はすべてを放り出してしまふ。子を孕んだ瀬尾に手紙を持たせて明け方、施設からそう遠くはないとこ

りにはいかなかったものの、彼らとともに石を投げつづけているあいだに感じる優越と仲間意識はこの上なく心地よいものだった。あとになつてから相手の気持がなんとなく思いやられ、胸苦しさを一人抱えこむことも、ごくたまにはあった。学年があがるにつれて胸苦しきの度合いが増し、級友たちとのあいだにある隔たりが、いっそう感じられるようになっていった。やはり自分は石を投げられる側の人間でしかないのかもしれない、と脳裏によぎる思考を追い払うように次から次へと石を投げ、相手の、我が身を庇う両腕のあいだから覗く恨みの目から目を逸らす。級友の中には、しだいに募りゆくこちらの惑いを知ってか知らずか裏切つてんと庇つたれや、かわいそうやんけ、と口もとに薄笑いを滲ませる者もいた。

浪人生となり、小遣い稼ぎの簡単なアルバイトを探していたときに、このコスモス園の求人を見つけた。はたして自分は石を投げていた側なのか投げられていた側なのか、自身の在るべき位置とでもいうべきものがさっぱりつかめないまま高校生活を終えてしまい、胸に抱えこんだままのわだかまりをどうするべきかと思案に暮れて、それについてはなにも考えずにいることにしてしまった。雑誌にその募集記事を見つけたとたんに、考えずにいようとしていたことなどすっかり忘れ、ここで障碍を抱えた人たちの中へ入って彼らと向き合っていれば、その在るべき位置と

いうものがおのずと見えてくるかもしれないと閃き、目を通してみたものの、勉強する時間がいっさい失われてしまふような内容に、いったんは諦めた。七月に入つてふたたびおなじ雑誌に記事を見つけ、そのころはちょうど、もともと興味があった文学部は就職が不安だからと、いくら両親を説得しようと試みても受けさせてもらえそうにないこともあつて、浪人してでも大学へ進みたいという気持がはたしてどこまで本気のものなのか自身でも怪しくなつてきていた時期で、やはりすこしはためらつたものの、働いてみて研修期間のうちにどうするか決めてしまえばいいことだと、思いきつて電話をかけたのだつた。

働いてみると、彼らもまた楠原を自分たちとおなじ立場にあると見ることはなくて、まわりにいるほかの健常者に対するのと同様の接しかたを、ごく自然なかたちでおこなつてきた。初めのうちこそ感いはしたものの仕事を覚えるにしたがつて馴れてゆき、気づけばいつのまにか胸に湧き起こつていた素性の知れない安堵に危うさを感じたものの、あまり深くは考えずに過ぎてしまひ、施設に預けられている人たちとの親しみを順調に育んでいるつもりでいた。その矢先に同居人から金を盗られ、瀬尾に救われたのだつた。あの一連のできごとの中で、それまでに感じてきていた安堵の正体を、漠然とながら知ることができた。いや、違う。それまでに薄々感じていた安堵の正体についてま

ともに向き合うことを避けてきていた自分に気づいた。そして瀬尾を胸に抱いて舌を絡ませ、なおもその正体から目を背けていた。背けつづけていた……。

あたりがすっかり暗くなつて、より寒さが増したころ、急に客足が繁くなり、楠原たちは喋る間もなく対応に追われた。品物はすぐに売り切れ、ワゴンに提げていたベニヤの看板を台の上に載せた。瀬尾が施設へ迎えの車を頼みに近くの公衆電話へ向かい、泊がふたたびうたい始める。施設に預けられている人たちには携帯電話の類を持たせず、また、決められた時間までに曳き売りを終えてしまつたときの連絡を彼ら自身にさせるのがこの方針だつた。

ちょうどいま向かつてるつて、と瀬尾が戻つてきて言い、楠原の横に腰をおろす。今日は疲れたね、と瀬尾が両手を擦り合わせて言うのに楠原は、うん、とだけ応え、駅へ出入りする人々の往来を眺めていた。ちょうど風が出始め、誰もが身をすくませて恨めしげな目を宙へやる。往来の影はだんだんと落ち着いていった。

バスロータリーのあたりから、一人の人影がこちらへ向かつてくるのが見えた。まわりの人々がその人物を避けて歩くので、ひときわ目立つ。いつもこの時間、二十時すこし前になると広場にあらわれる、ホームレスの男だつた。ふと立ちどまり、右手に持ったビニール紐につながれた犬

がまったく違う方向へ行こうとするのを抱きかかえ、左手に提げた紙袋を、いったん地面に置いて持ち直した。黒く汚れた衣服の上に年中、どろどろの擦り切れた毛布を羽織つている彼は、まわりに遠慮する素振りなど微塵も見せることなく背すじをまつすぐ伸ばし、蓬髪の下から前方を凝視して、ゆつくりと大腿に歩くのだった。

また見てる、と瀬尾のあきれたような声が聞こえてきた。いつも見てるよね。楠原はなにと言わずにうなずき、瀬尾の顔をちらりと横目で見やつた。男が前を通りかかるときに瀬尾が、どうして働かないんだろうね、あの人、と面白がるようなふるえ声で囁いてくる。男の腕に抱かれた犬がかかるく振り返るのが見えた。楠原はなににも答えなかった。

広場の向こうに見える車道に、施設のワンボックスがとまつた。中から金髪の男職員が降り立つて、手をあげてこちらへ近づいてくる。ご苦労さん、寒かつたやろ、と籠の中を確認する男職員の言葉に、瀬尾が疲れた声で応じる。

楠原はなにと言わずにうなずき、ワゴンを押し歩き始める。近くで人の怒鳴り声と叫びが入り乱れ、ざわめきがつづいた。足をとめて目をやると、さきほどのホームレスの男が頭を押さえ、片膝をついている。頭を押さえている手から腕へ、赤いものが伝う。犬はホームレスのことが心配でたまらないというふうにかん高く鼻を鳴らしながら男に寄り添つていた。男と犬のまわりに人だかりができ、すこし離

れたところで、五人組の男が走り去つていくのが見えた。

人だかりは増減する様子もなく、一定の人数を保ちつづける。地面の血溜まりに浸した肘を枕に男は寝転がり、犬がいつそう高く鼻を鳴らす。まわりの人間はみんな、痛みをこらえつづけている怪我人を遠巻きに眺め、こそこそと囁き合つたりするのみだつた。風がいよいよ吹き募り、脇目も振らず建物へと急ぐ姿がだんだんと目についてくる。

楠原は歩度をゆるめて片方ずつのひらに息を吐きかけ、その様子を眺めていた。いまずぐ携帯電話で救急車を呼び、群集の中へ飛びこんで男に声をかけ励ます自分の姿を思い描いていた。なんとかして実行に移したいとも考えるのだが、足は一途にワンボックスのほうへ向いていく。

男はいま、どれほどの痛みに見舞われていることだろう、どれほど寒いことだろう、血溜まりに頭を濡らし、ゆつくりと遠のきつつある意識の底から、心配そうに鳴く犬の声や、まわりのざわめきを、どのような気持ちで聞いているのだろう。プラスチックの車輪が立てる、かるい音が耳についた。ふと、うしろを振り返ると男職員が群集を横目で見やつて、口もとに皮肉な笑みを浮かべていた。目がこちらへ向けられて楠原は慌てて顔を群集のほうへ向け直す。

そこではちやうどニット帽を被つた初老の男がホームレスの男のかたわらにしゃがみこんでなにやら声をかけ、自分は救急車を呼ぶので誰か早く警察を呼ぶよう、声をあげて

周囲に促していた。群衆は目を交わし合うばかりだったが、やがて一人の若い男が携帯電話を取り出し、切迫した雰囲気になにか話し始める。

パトカーが先にやってきたところに、施設の事務所へ向けてワンボックスはゆつくりと走りだした。エアコンに暖められた車内は心地よく、瀬尾と泊はすぐ眠りに就いた。もうすぐで終わりやな、と男職員が言うのに、その斜めうしろの席にいる楠原は、はい、とちいさく返し、ルームミラーに映る相手の目を見た。もうちゃんと言うたんか、とクラッチレバーを操作しながら男職員が問い、楠原は、まだです、とだけ答える。そうか、と男職員はうなずき、ちゃんとお別れ言うとかんと、たぶんあとで後悔するで……まあ、なんて言やいいかわからんか、と男職員は赤信号で車をとめて、流れているAMラジオの局を変え、さきほどの、ホームレスの男が襲われた事件について話し始める。楠原はまともには聞かずにルームミラーに映る男職員の目へ向けて口もとに笑みをつくり、隣に眠る瀬尾の寝息へ耳を澄ました。喉の奥底がふるえる心地がして、楠原はすぐにそれを聞くのをやめ、結露した窓をてのひらで拭って外へ目をやる。対向車が光を滲ませて次々とうしろへ流れていく。ホームレスの男が流していた血や叫びを前にして、どうすればいいのかわからずにただ惑いつづける自分の姿が脳裏に浮かぶのを見つめ、ホームレスの顔が自身の顔になっている

のをも見つめ、疲労や眠気が全身に鈍くのしかかってくるのを、じつとこらえていた。

太陽の光が湿気に粘った空気を突き抜け、皮膚を灼く。蒸し暑さは全身の皮膚の表にだけあり、楠原自身は喉の渴きのみを強く感じていた。あの日から瀬尾はほかの仕事にまわされて、もうなにかの作業で一緒になることはなくなり、結局最後までちゃんとした別れの言葉はかけられなかった。

潰された甲羅はいまや完全に乾いてしまっていたが、黒いアスファルトの上で日に照らされて、遠目には白く光って見えた。近づく光は失せ、潰れた腹や甲羅がただそこにあつた。ひとたび強い風でも吹けば、たちどころに跡形もなく崩れ去ってしまうだろう。なんとはなしに目を離せずにいるうち、楠原は甲羅の顔に苦悶や怒りの表情が浮かびあがってくるのを見た。港へと向かう途中、一、三の骸を自棄にまかせて蹴散らしたことを思い出し、かるく頭をさげる。

その日の夜、眠りが自然と浅くなっていくうちに複数の男の声が聞こえ、楠原はそのまま声に引きあげられていくようにして目が冴えてしまった。昼間とおなじ三人の声だった。氣遣って低く抑えているつもりが、話しているうちにおのずと素に近い声となり、しばらくするとそれに気

づいてか、また声がひそまる。ひそまりかたにしかしどこか粗いところがあり、呂律も怪しい様子から、酒が入っているものと思われた。ときおり笑い声が起こり、迷惑だな、と楠原は声の洩れてくる壁に背を向け、固く目を瞑る。聞くまいとする思考が、かえって意識を声へと向かわせてしまう。どうやら昼に西宮でフットサルの試合をしたあと、どこかで遊んできたらしい。聞くともなしに聞いているうち、ひよっとしたら自分も大学に行っていればこうした時間の過ごし方もありえたのだろうか、彼らの会話ですぐそばでうなずきながら聞いている自分の姿を脳裏に見ていた。彼らのチームはどうやら負け、隣室にいるうちの一人が、負けた原因とされる後輩を居酒屋の個室で殴つたらしく、話題の中心は主にそのことだった。自分もおおかた、殴られてしまうほうか、と楠原は聞きながら苦笑しいや、そもそも自分が大学生であつたら、フットサルはおろか、スポーツなどなにもやらないだろうし、早石たちのような人物と関わることもないか……と思考が振れたとき、もう二度と来ることはないやろな、あの様子やと、と早石が言い、ほんま酒入つたらどうしようもないな、まったく憶えてへんの、と問うと、詰め寄って思わず手が出そうになつたのは憶えてるけど、そこからは全然やな、あのあとほんまに手出しとつたんやな、カラオケ行つたんはそのすぐあとぐらいなん、と相手が返し、さらもう空気悪なつた

からな、殴つた本人はカラオケ屋の部屋入つた瞬間爆睡しとつたけど、ともう一人の声が答えて笑いが起こつた。殴られた後輩は二次会のカラオケには行かずに帰り、早石があとから出したメールにはまだ返信がないと言う。なんでもメールなんかするねんな、もう放つといたらええやん、あんな鈍くさいの、と後輩を殴つたという男が不平を述べるのに、ええやんけ別に、と早石が、居酒屋で隣に座つた女の子が気にしてメールしてみよう言ってきたのだと、つまらなさそうに弁解する。それで、あの子どうやつたんなんか喋つたん、と早石以外のどちらかが尋ねたのだろうが、すでに楠原には判別がつかなくなつてきていた。ああ、まあ、いろいろ、その子もカラオケには来てくれんかったけどな。その女の子は出屋敷駅近くの本屋でアルバイトをしていて、たまに出勤の途中に駅前でパンを買っているらしい、という話が楠原の耳に残つた。出屋敷の駅前にパン屋なんかあつたつけ、と声が挿まり、ああ、なんか障碍者の人らがたまに駅前で売ってるらしいな、と誰かが言う、ああ、西宮北口でもたまに見るわ、そういう人ら、出屋敷にもおるんやな、ともう一人の声が届いてくる。でも、値段のわりにそんな美味くもないんやな、ああいうとこのパン、かたちもちよつと不細工やし、ええ材料使つてるから体にええんやとか言うてるけど……。

家を出たのは一時ごろだった。阪神若屋駅まで歩いて券売機の前に立ち、しばらく考えこんでから、コスモス園の経営するパン屋へ行くことを決心した。昨晩、早石らが話していた出屋敷駅前の話を聞きながら考え、しかし実行しようという踏ん切りがなかなかつかないでいたことだった。瀬尾京美の死について、自身の内ではつきりとさせてしまいたいという思いが募っていた。園長のいる事務所を訪う勇氣はなかつたが、パン屋であればまだ気安く立ち寄れそうだった。時計と時刻表とを見くらべているうちに列車がやってきて、目の前で開かれたドアから乗りこむ。車輻には楠原のみしかいなかったが三人ほど増えて、ドアが閉まる。

久寿川で降り、改札を抜けて駅舎を出ると、見覚えのないマンションが建ち並んでいた。記憶を辿りながら線路沿いをまっすぐ行き、小川にさしかかったところを左に折れると以前にもあったと容易に思い出せる店が軒並みひっそりと営業している。

記憶を頼りに模型屋の角を曲がって、住宅街へとつづく道を取った。人通りは絶え、雀の声だけがどこからか聞こえてくる。目の先に古本屋のワゴンがあり、その向こうに目的のパン屋の立て看板が見えた。動悸の昂ぶりとともに

潮した顔に満面の笑顔を浮かべて挨拶してきた。挨拶が終わるや否や、女が男のびったりとしたシャツの裾を引っ張り、さ、戻ろ、早よ掃除せんと、と早口でまくし立て、男は困惑の表情できよときよと楠原と女とを見くらべ、うん、中で掃除していいよ、と泊の出した指示に従って、中へ引つ張られるがままにされる。おれらも中入るか、と男職員が言い、楠原はそれに従った。

いなくなつてからずっと、淋しがつてましたよ、と泊は楠原がかつて住みこみで介護していた男の名前を出した。楠原は名前を聞いてすぐに浮かんだ男の顔を懐かしみ、元気なのかと尋ねると、泊は笑い顔のままうなずく。相変わらずだよ、手紙もつづけてるし、と男職員が言って笑う。

そういえば結局どうなったんだった、三千円は、と尋ねてくるのに頭を振り、すこしの間を置いてから、すっかり忘れてましたよ、と苦笑する。あれ、まだだったんだ、と男職員は目をまるくし、あれはでも、まだ認めてなかったんだったかな、たしか、と首をかしげた。まあ、もう、いいですよ、なかったことで、と三千円について追及した折の男の様子を脳裏に思い浮かべていた。なかったことにしてしまってもいい、とは本心からだ。実際に、瀬尾の死に初めて触れた日に思出すまでのあいだ、何年間もずっと頭から離れ去っていたことだった。男職員はおもこだわるふうに、じつとこちらへ視線を送りつづける。話を逸

足どりの妙に騒ぐようなのに気を取られ、古本屋の前に置かれた自転車にぶつかりそうになったのをどうにかかわしてよるめいた。パン屋の前で歩度を落として横目で中を確認すると、泊と、相変わらず髪を金色に脱色している男職員、それに知らない人物が男女一人ずつ、仕事の合間らしく、それぞれ手に飲みものを持って談笑している。足をとめてその様子を窺っていると、女がこちらに気づいたのかふと動きをとめ、つられてまわりの者らが視線を向けてきて、とつさに慌てて先へ歩きたした。

すこしも行かないうちに、楠原さん、と声をかけられ、振り向くと泊が、笑いを浮かべた顔で大きく手を振っている。男職員も、ひさしぶりやん、と外へ出てきた。楠原は踵を返してちいさく手をあげ、しばしためらったのち、二人のもとへと歩き始める。歩き進むうちに緊張が解れ、懐かしさに口もとが自然と綻んでくるのをなんとかごまかそうと固く口を閉じるが、口角のあがり気味になるのはどうすることもできず、二人の顔を眺めやりつつも、目を合わすのは避けた。店の前まで来ると中に残っていた女のほうが扉をなつかげ開けて、内にいる男を大声で呼びつたどたとしく初対面の挨拶をする。楠原が辞儀をして返すと、男職員が、ごく最近入所してきた人たちだと紹介する。そのあいだ、中にいた男が肥り肉の体を外へ運び出してきて大きな目で楠原の姿を見つめ、目が細まったかと思うと紅

らしてしまおうと、かつて住みこみで瀬尾の介護をしていた女職員はどうしているのか尋ねてみると、ああ、彼女なら、ずいぶん前の秋ごろに辞めたよ、と答える。国際ボランティアに参加して、貧困に苦しむ遠い国へ旅立って行ったということだった。あちらの国へ旅立って行った一度手紙をよこしてきてからは、これといって連絡もないという。それじゃあ、瀬尾さんのことは、と楠原が声を洩らしたのを受けて、ああ、知らないはずだよ、こちらからもわざわざ知らせることはない、と、園長が決めたことだし、と男職員が答える。異国の地で瀬尾の存在を微塵も疑うことなく暮らしているということか、と楠原は女職員の身の上を思いやりつつ考えた。ふと、なにげなしに瀬尾のことを思い出したとき、彼女はすでにいない人間の身を想うわけか。いま、女職員は彼女自身が見えている現在を生き、楠原自身はそれとはまったく別の、瀬尾京美が殺されたあとの現在にいる、そういうことか。でも、それはあたりまえのことだ。かく言う自分も、ついさきほどまで、コスモス園にいますた女職員が勤めをつづけていると思ひこんでいた。結局はおなじことだ。なにも珍しいことではない。しかし反面、そのことがなにか途方もないことのように思われた。いないということを知らなければ、当人にとつてその人はそこにいるということになる。それならば、いるということを知らなければ、ずっとその人はいないということか

……。いることとしないこと、いったいどちらが本当なのだろう。そこまで思考が及んだところで言葉に窮し、無言のままゆっくりと首をかしげる。二人の姿を前にして、なにか言わなければ怪訝に思われるとおそれながらも、言うべき言葉がなにも一つ、その片鱗すらも見出すことができない。焦るほどに時間の流れが淀み、つかの間の沈黙のほすが、ずいぶん長く感じられた。縦るように男職員の目を見、泊のほうへ視線を移した。泊と目が合ったとき、相手の唇がすかすかに動き始め、こころもち前へ身がのめる。

京ちゃんのこと、来たんですか、と泊の口から声が発せられ、楠原は、うん、とうなずいて、ひそかに胸を撫でおろした。ああ、なるほどな、と男職員がそれを受け、新聞読んだん、と尋ねてくる。神戸新聞のサイトで知りまして、と楠原は答えて、それで、ほかのみんなはどうしてるだろうと思って。ああ、いまはもう、ご覧のとおり、だいぶ落ち着いてるわ。事件が発覚したときはそもそも大変やっただけ、と男職員は腕を組んで地面をかるく右足で蹴り、泊が、園長も真っ赤になって泣いてましたもんね、と神妙な顔で口を挿し挟むのにならずいて、俯かせた顔から目だけを楠原のほうへ向けた。楠原は、なんだか想像できないですよ、と言いながらも頭の中には、いつか事務所で楠尾との関係を咎めてきたときの顔が苦しげに、目のまわりを赤く腫らしゆがんでいる。

に呼び出され、瀬尾から手を引かないと辞めてもらわなければならぬと告げられたとき、犯人は、そんなに心配しなくても、自分は瀬尾さんのことを真剣に考えている、しっかり責任を全うして、ともに暮らしていく、その覚悟はできている、信用してほしい、自分はこれまでの男たちとは違うのだ、と熱っぽく語ったという。

楠原はそれを聞いて苦笑し、男職員の顔から目を逸らした。あのときの園長の苦りきった表情がありありと浮かんでくる。言うことはみんな、おなじですね、と零すと、男職員は笑った。

犯人はそのあと一週間ほどしてから、福祉系の専門学校を受験するための勉強をしたとかで辞めていった。急な話ではあったが、危惧された事態が起これば済んだというところで、職員はひそかに胸を撫でおろしつつ、名残り惜しげに犯人を送り出したのだ。

ところがそれから一年近くが経って、瀬尾がコスモス園から姿を消してしまった。施設の間人が総出で近隣を探しまわってみるが、どこにも見あたらない。いなくなつて三日後にやっと、一年ほど前に辞めていった犯人のことが思い出され、楠原がかつて住みこみで介護していた男のノートから、犯人が独りで住んでいたマンションの住所が調べ出された。さっそく隣町にあるそのマンションへ行つてみるとすでに空室になっていて、管理人によれば、ちょうど

犯人について尋ねてみると、彼は七年前に勤め始め、屈託した様子もなく人当たりのいい、どちらかといえば好青年の部類に含まれる男だったという。ただ、コスモス園で勤めだす前に恋人から別れを告げられたとかで、かるい恋愛話などに打ち興じている最中に、ふと遠い目つきをすることがたびたびあった。いくら歳上の、芯の強い女性だったらしい。相当、その女に惚れてたみたいやったよ、と男職員は言った。そのことが、いまだとき珍しく一途な男だと職員をあいだで評判だったという。それがまさか瀬尾の誘いに乗ってしまったとは、いつもどおりに警戒はしていたものの、誰も予想はしていなかった。いつだかの秋ごろに辞めた女職員はそれでも、楠原という前例の記憶が彼女自身にとつてずっと心残りのことだったこともあって、瀬尾があまり犯人のそばへ寄ったり、行動をともしないよう細心の注意を払っていたのだったが、彼女が辞めてコスモス園から離れてしまつてからは、二人並んで談笑したりしている様子が目につくようになった。これはまずい、と職員が警戒を強めたところには、おそらくもう、犯人の心はほとんど瀬尾のほうへと向いていた。それは間違いない。そんなタイミングで、やめておくように忠告したものだから、あれはもう、遅かった、完全に、と男職員は言った。やめておくようにと諭されたことに反発する恰好で、犯人はますます瀬尾への思いを募らせていった。そのうち園長

勤めを辞したころに引き払っていったと言う。事情を説明して、どこへ引越していったのか尋ねても、犯人はとくになにも言い残さなかったらしく、わからなかった。勤めを辞めたいと切り出したころにはもう、計画はできたらしいよ、と男職員は言った。また男に孕まされたあげくに捨てられ、戻ってくるのか、と施設の間人はなげきながら、それでも遅かれ早かれ、いつかは生きて帰ってくるものと信じて疑わなかった。それがみごとに裏切られたわけだ、と男職員は言った。瀬尾と暮らしているあいだ、犯人はパチンコ店でのアルバイトで生計を立てようとし、暮らしぶりはやはり、いいものではなかった。それでも初めのうちは、二人でおなじ古マンションの一室に住まい、飯を食い、肌を重ねることが、この上ない、至福の時間と思われていた。しかし、そのような日々もやがては、ななの変わり映えもないものとして泥ん^ずでくる。毎日パチンコ店で半日働き、月ごとに稼いだ金を持ち帰る反復の疲労と責任が、男の肩に重くのしかかってくる。そこで瀬尾にもすこしは働いてもらおうと、簡単なパートの面接に出してみるが、ことごとく不採用となつて、採用されたとしても三日と経たないうちに職になった。瀬尾が施設に戻りたくなるのも、無理はない。犯人の苛立ちも募る。それでもなお肌を重ねて情を交わし、互いの不平不満を曖昧にぼかしていったことだろう。しかし、そんなことがそう長くつ

づくわけもなく、何度目かの口論の果てに、犯人はとうとう、瀬尾を刺し殺してしまふ。頼られることに応えられなくなつて、頼つてきていた人間が離れていくのが、よほどつらかつたらしいな、と男職員は口もとに皮肉を滲ませて言つた。その口調にも、犯人を切り捨てるような情感がこもつていた。楠原は目を地面へ落とし、ただ黙りこんでいた。男職員の怒りは十分に理解できたが、やはり犯人のことは気にかかつた。いつかの自問自答が、胸の底から浮きあがつてくる。犯人もおそらく、瀬尾とともにいるときには、楠原自身の感じていたのとおなじ安堵があつただろう。

まあ、こんなとこやな、としばしの沈黙のあと、男職員は煙草を吸い始める。楠原も一本銜えて火を点けた。指さきがかすかにふるえた。頭の揺れに身をまかせ、萎えかける足をどうにか踏ん張つた。二口目の煙をゆっくりと吐き出してから、ようやく、大変だつたんですね、と眩くようにして言つた。男職員は唇だけで笑つてうなずく。楠原はほかにもなにか言いたいことがあると思つて、宙を眺めてあれこれと考えてみるが、かたちはつきりしないほやけたものが、頭の中に鈍くたゆたうのみだつた。もどかしく思いながら、楠原は一つ頭を横に振る。ふと、二人の様子を始終おとなしく眺めていた泊と目が合つて、会釈して笑いかけてくるのでちいさく頭をさげて、あいかわらず曳き売りのときには歌をうたつているのか尋ねると、ばつちり

ですよ、と返され、三人いつせいに声をあげて笑つた。男職員と泊に別れを告げ、楠原は来た道を返した。

六

自宅の最寄り駅へ着いたころには、蒸し暑さはまだ少し残つてはいるものの、もうだいぶ日も傾いて、あたりの空気が藍色をおび始めていた。商店街で発泡酒と弁当を買い、海沿いの道へ出ると、しばらく立ちどまつて潮のにおいをたつぷりと吸いこんだ。西のほうへ目をやると、太陽が海の上へ光の筋を投げ、波がそれをまぶしく撥ねている。光の中を多くの鳥影が、啼き声を立てて飛び交つている。潮が満ちてきているらしく、波の音がいつもより近い。堤防の下を覗きこんでみると、蟹の死骸が大量に浮いていて、白く光を散らしながら、ゆらりゆらりと、黒い木片をいくつも巻きこんで、ひとつどころに集まつてはまた拡散し、だんだんと沖へと漂い進んでゆく。名残り惜しくその様子をちらりちらりと見やりつつ、足を自宅へ向けた。自身の影が斜め前方へとうつすらと落ちていた。

自宅へ帰つてくると、蟹が部屋のあちこちにいた。留守中に進入してきたうちの一部分が、ここから抜け出すこともままならないうちに居座つていたのだろう。近づくと、緩やかな動きでその場から離れようとし、三歩ほども動いたあ

たりで、ふたたび動きをとめる。すでに息絶えてしまつているのも、いくつかいた。しばらく考え、生きているもののみを、二つのバケツへ入れていつた。乾いた甲羅を指でつかむと、力弱くも蟹を突き出して威嚇してくる。なるべく衝撃を与えないように、バケツの底に近いところからそつと落とすようにしていると、あるとき、そばにいた別の蟹に人差し指の背を挟まれ、そのままにして見ていると、じわりじわりと力がこめられてくる。あるていどのところで手を目の高さまであげると、蟹は脚を手へ掛けようと宙を掻き、蟹にさらに力をこめてくる。手の甲を下へ向けてしまうと、その努力もむなしく、蟹はまっすぐバケツの底へ落ちて、ひっくりかえつた姿勢のまましばらくもがき、片方の蟹の背を底に当て、勢いをつけてくるりと起きあがつた。その様子を感心して眺め、またやられてはかなわないので、それからは蟹の届かない高さから落とすようにして入れていく。すでに動かなくなっているものは、畳に敷き詰めたティッシュの上へ集めておいた。目についたものをひととおりバケツへ入れてしまつても、万年床や、出しっ放しにしてあつた衣服を剥がしてみれば、またあらたに四、五匹の姿が見つかった。

すべての蟹をバケツへ入れてしまつと、風呂用の洗面器に、食卓塩と水道水とで塩水を作り、バケツの中へ注いだ。すると息を吹き返したようにバケツからこまかい音が湧き

立ち、ほつと息を洩らす。水に濡れた甲羅が、電灯のあたりを白く集めて蠢いている。食卓塩と水道水による塩水などではたして大丈夫なのかと心もとなくはあつたが、浜を侵食している海へ直接蟹を投げ入れるのもそれはそれで心配だつたし、海水を汲んでくるにしても、隣室の早石にでも見つかれば、あれこれと詮索されたりしそうで、それは避けられた。明日の朝早くに海へ返せば大丈夫かな、と静まり返つている隣室へ耳を澄ませた。酒を買いに行こうなどと云つて友人たちと出かけるのを、しばらく前に聞いていた。何時ごろのことだったのか思い出せない。時計を見ると、いつのまにか十一時をまわつていた。冷蔵庫に入れておいた発泡酒を、すっかり冷めてしまつた弁当を肴に呑み始める。蟹たちの立てる音がすこし落ち着き、ときおり短く立つだけとなつてくる。死んではいけないかと不安になつて覗きこみ、割り箸の、手に持つほうの先でついでみたりもした。蟹たちと差し向かいになつて遅い夕飯を味わつているうち、パソコンで消費者金融のウェブサイトを眺めていた。このまま仕事が見つからなければ冬には貯金が尽きてしまいそうだったが、両親に頼つたりしたくなかつた。実家に戻るなどはもつてのほかだ。蟹に挟まれた人差し指の背が、またかすかに疼きます。

発泡酒を空けてしまつたところに早石たちがどやどやと隣室に帰つてくる。酒を呑みながらDVDで映画でも観るつ

もりらしく、まずはどれにしようかと盛りあがっていた。聞き覚えのある、筋肉アクションものの題がいくつかくりかえし口にされた。楠原は隣室の賑わいをよそに空の弁当をかたづけてあかりを消し、湿った布団の上で目を瞑った。翌朝、四時過ぎに目が覚めた。部屋の中はまだ暗く、バケツの中の蟹も、ひっそりと静まっている。隣室からも、物音一つ響いてこない。夜中の二時ごろにいちど目が覚めたとき、筋肉アクションに興奮しきっていたのだろう、酒気をおびた喚き声がるさくて、そこからなかなか寝つけずにいたことを思い出し、苦笑した。新聞配達員のバイクが部屋の前を走り去っていったのを機に、パジャマのまま両手にバケツを持ってガラス戸の外へ出た。

外はだんだんと薄暗さの内に朝の気配がふくらみ、あたり一面が蒼い空気に覆われていた。ガラス戸を閉めたあとに耳を澄ますと、海の音が聞こえてくる。それ以外に音はなく、自然と息がひそまる。砂利を踏みしめて歩くのにも、ゆっくりと、慎重に足を運ばされた。

海沿いの道に出て堤防の階段へと向かっていくうち、ふと足をとめる。目の先に三人の男の姿があり、遠目からでもその一人が早石であることが確認できた。引き返すか、別の道を通るかしたほうがいいだろうかと思いつつも、足はまっすぐ前へと進む。三人はたがいに小突きあい、蹴りあい、笑いあっている。あの様子なら、すぐそばをそっ

はあ、なに言ううとんねん、といつか耳にした、後輩を殴ったという男らしき声がし、三人の笑い声が立った。声のしたほうへ目をやると、背の高い、痩せた男が、こつち見んなと靴底で横面を蹴り、なんか腹立ってくんな、こいつ見とつたら、と胸のあたりを踏んで体重を載せてくる。胸への圧迫に悶え、楠原はなす術もなく早石と小柄な男からの蹴りをも味わわされることとなった。途中、誰からか言い放たれた、変な口しとるくせによ、という言葉が耳に残った。

疲れたのか、不意に攻撃が止み、楠原は戸惑いながらも三人が見守る中、起きあがるうとしては全身の痛みにもふたたび尻が地面につく。疼く下唇に右手の甲をあてると、血液がべつとりとついた。もういちど口もとに手をやり、血液を拭ったとき、ゆがんだ上唇がその感触を鋭敏に拾いあげてくる。三人が襲いかかってくるのはしなやかと緊張しながらも、足はなにおも向きを変えようとしな。そこへ早石が声をあげて殴りかかってくる、とつさにそれを振り払うように腕を大きくまわすと、拳にやわらかな感触があった。早石はその場で片目を押さえて屈み、瘦せた男が、階段近くまでたどり着いた楠原の背へ跳び蹴りをくらわせる。楠原は体が大きく揺らぐのをなんとか持ちこたえることができた

と通り抜けても気づかれないのではないかと淡い期待が萌し、こころもち歩度をあげる。笑いあう三人の傍らへ差しかかったとき、背の高い、痩せた男と視線がぶつかり、楠原はすぐに目を逸らした。ところへ早石が、あ、おはようございます、と目の前に立ち、楠原が挨拶を返している隙にバケツへ首を伸ばす。まずいと思いつつも平静を装い、どうかしましたか、と尋ねるものの相手はなにも答えず、うしろへさがり、ちゃんと、殺したんですか、と返してきた。もちろんですよ、と楠原は口もとに笑みをつくり、早石の両側にいる友人のうち、小柄な男の脇から通り過ぎてしまおうと、ゆらりと身をかかわそうとするも、バケツの揺れを察してか、蟹がプラスチックを掻く音がにわかにならぬ、全身が宙に浮いて、アスファルトの上へ叩きつけられた。バケツは投げられる瞬間に手から離れた。まだ生きてるじゃないですか、と遠くから早石の、わざとらしく怒気を含ませた声がし、楠原がきよきよとあたりを見まわしながら起きあがるうとするのに手を貸した小柄な男がふたたび、こんどは背中越しに、楠原を地面へ叩きつけた。なんなんですか、なんでちゃんと決められたことを守らないんですか、と早石の声がゆっくりと近づき、楠原は身を起ししながら、かわいいそうだから……と喘ぎ喘ぎ声に出す。

ものの、態勢を整えようとした足がほんの一瞬宙で留まり、しかしそのままおろされて、階段を踏みはずす。

楠原の体はコンクリートの段を勢よく転がり、濡れた砂浜に着地した。早石たちもすこし遅れて階段を降り、うつぶせに倒れている胴体を足で突いてみるが、なんの反応もない。頭から血を流しているのを見つけ、早石は、生きてますか、などと問いかけてみるものの、返事はなかった。びくともせん、と痩せた男が吹き、小柄な男が、楠原が持っていた二つのバケツの残りをすべてぶちまけては、まだ起きんか、とバケツを傍らへ放る。楠原の全身を蟹が這うのを眺めながら、もうくたばってもうてるん違うか、もしかして、と早石が舌打ちする、やりすぎたかな。最後は絶対あれ、自分から落ちていったよな、と小柄な男が確認するように言うに残りの二人は黙ったままうなずき、行こうや、と早石が瘦せた男の裾をかるく引つ張ると、三人は階段をのぼり、去っていく。

製剤分析室には数種の有機溶媒が混ざった臭いがたちこめられている。外から帰ってきたときだけ痛烈に鼻腔粘膜が刺激をうけるけれど、五分もすれば馴れてしまう。器具を洗うのも水ではなくアセトンなのだから、実験室の壁一面に据えられたドラフトも無意味だ。大学院卒業以来二十二年にわたってこの環境にさらされ続け、脳細胞は刻々と変成

「篠原さん、おかえりなさい。お疲れさまでした」
髪が流れ、現れた片頬にえくぼを刻んだ後輩に微笑みを誘われた。いつもみたいに会釈だけではなく、お疲れさまと声を出した。
裕子の実験室に入ってきた気配を感じたのか、ケミカルバランスの前に座った後輩がゆっくりと顔をこちらに向けてる。

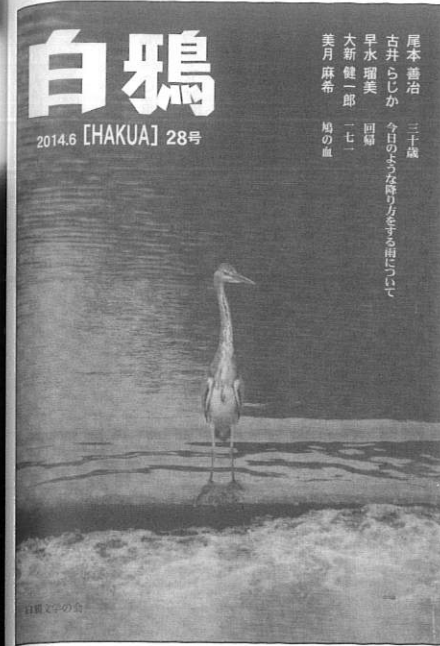
同人雑誌優秀作

白鴉

ビジョン・ブラッド
鳩の血

みつき まぎ
美月麻希

しているはずだ。
高速液体クロマトグラフィーに繋がったオートサンプリングのターミネータブルには、整然とバイアルが並んでいる。シリンジが試料を吸い上げると、ことんと回る。朝までには、すべてのデータがそろそろ。まったく同じ外観、無色透明のバイアルの中身は、カラムに注入されるわずか数μlが描き出す波形でその成分と量が明らかに。そのうち、Dとして分析できるならばどれほど簡単だろう。そのうち、DNA情報の解析が進んで、何もかもが明らかに。日があるだろうか。iPS細胞やES細胞を使って、男性不在で子どもができるようになったとして、その子の心はどんな風なのか。少なくとも自分よりは人間らしいのではないかと裕子は思う。何かと比較することで実態が明らかに



尾本善治

おもと よしや

- 1978 大阪市生まれ
尼崎市で育つ
- 96 兵庫県立尼崎稲園高等学校卒業
- 2000 大阪文学学校入校
- 01 大阪文学学校修了
「白鴉」入会
- 02 「白鴉」10号にて「夜明けの岸辺」掲載
- 03 「白鴉」13号にて「冬」掲載
- 08 「白鴉」22号にて「蟹かに」掲載
- 11 筆名を現在のものに改め、26号に「雪の日」掲載
- 14 28号に「三十歳」掲載



美月麻希

みつき まぎ

- 1960 神戸市生まれ
- 83 徳島大学医学部栄養学科卒業
大塚化学株式会社農薬研究開発部を経て
- 現在 株式会社リヴァイヴにて経理責任者

大阪女性文芸協会
白鴉文学の会
大阪文学学校

